巻頭特集

2005年度新入生に贈る

Welcome Message

新入生へのメッセージ

Takehiko Sugiyama

一橋大学長
杉山武彦

大学生にとって、基礎体力とは何か

魔法のやかんに入っているのは、ただの水にすぎないけれど

学生時代の私は決して体格に優れているわけではなかったのですが、高校と大学の７年間、ずっとラグビーに入れこんで、前歯を欠いたり、関節を痛めたりはしょっちゅうのことでした。脳しんとうも２度経験しています。最後の試合は、光栄なことに秩父宮ラグビー場での試合でしたが、そこでも見事に足の骨を折って、病院にかつぎこまれるという始末。７年間は怪我や故障の連続でした。そしてそのたびに<魔法のやかん>のお世話になったものです。

魔法のやかんというのは、ご存じのことと思いますが、試合中に倒れた選手に水をかけてやると、のびていた選手がむくむくと起き上がって、戦列に復帰する、あの水の入ったやかんのことです。最近はやかんの代わりにプラスチ

杉山学長は学生時代、
ラグビー部から多くのことを
学んだという

ックのボトルが使われるようになって、魔法の水なんて呼ばれ方をしていますが、オールド・ラガーマンとしては、水はただの水にすぎなくて、魔力が宿っているのはやかんのほうなんだから、やっぱり<魔法のやかん>と呼んでほしいなと思ったりしています。

それはともあれ、大学生活というものをラグビーになぞらえていえば、大学での４年間は一種の練習と試合の連続ですから、勉強で打撲を受けたり、人との関係で捻挫したり、家の事情で昏倒したりということも、ままあることだといっていいでしょう。それを恐れていたら練習も試合もできません。ですから、大学では、倒れた選手に水をかける人や仕組みをいっぱい用意していて、みんなで力を合わせて戦列復帰を助けるようにしています。事務局の学生支援課はまさにそのための組織ですし、クラス担任やゼミの教員、クラブの顧問も、魔法のやかんをもって駆けつけてくれるはずです。

しかし、そうはいっても、水をかけられて選手が起き上がるのは、水に効き目があるわけじゃなくて、その選手自身が日頃から鍛えた強靱な体力をもっているからなんですね。最後にものをいうのは、やっぱり、選手個々人の基礎体力なんです。

自分の個性や特性を発揮するために、まずなすべきことは

では、大学生にとっての基礎体力とは何か。

もうずいぶん昔のことですが、数学の山田欽一先生が「学生は休暇につくられる」ということをお書きになっています。これはもちろん「歴史は夜つくられる」というクレオパトラの故事をもじってのことですが、学校の授業ではみんなが同じような勉強をすることになるから、個性や特性は生まれにくい。個性や特性は、休暇中に、みんながそれぞれにちがうことを見たり聞いたり読んだりすることで生みだされるんだとおっしゃっている。私もそう思います。

そこで、それをさらにもじっていえば、基礎体力というのは、授業期間中につくられるものなんじゃないでしょうか。大学によってあらかじめ用意されたカリキュラムを、みんなと一緒になって勉強することで、大学生としての基礎体力が養われる。スポーツでいえば、筋トレや走り込みの反復練習がそれに相当します。

もちろん、大学での勉強は、高校までの勉強とちがって、自分のしたいことや、自分にしかできないことができるというところに最大の意味があって、４年間ずっと基礎体力を養ってばかりいたら、なんのための大学かということになります。大学を卒業する頃には、自分が勉強していることはすべて自分が選びとったテーマだといえるようになっていてほしいと思います。

しかし、自分のしたいことや自分にしかできないことをするためには、それ相応の基礎体力が必要になるんですね。ですから、新入生のみなさんには、まずは大学生にふさわしい基礎体力をしっかり身につけることから始めてほしいと思います。みんなと一緒に勉強することによって、みんなとはちがう自分の個性や特性に気づくことだってできるからです。自分は体格的には恵まれていないけれど、こういうことでなら闘えそうだというようにね。（談）

新入生へのメッセージ

Nobuyoshi Tasaki

一橋大学副学長（教育担当）
田﨑宣義

4年後、自信をもって社会に出ていくために

より次元の高いところで次の世代を担ってほしい

一橋大学は、学生を自立した大人として扱っています。学生には学生の意見がある、そのことを大学当局は尊重すべきだという考え方が、一橋のいわば伝統になっているんです。たとえば＜一橋大学＞という名称も、学生は学生大会で決議して、大学側は教授会で決議した。両者の決議がめでたく一致して＜一橋大学＞に決まったんです。今も国際学生宿舎（学生寮）の運営について、学部生と大学院生と留学生にどう割り振るかなどを学生と話し合っています。

しかし、昨今、全学的な問題や運営に対する学生の関心が低く、学生の意見がまとまりにくくなっているようなところがあります。自治会の年2回の総会にも、クラブ活動などを優先して、出席しないという学生が多いんです。これは、一つには、彼らがこれまで自分たち全体の問題としてものごとを考えたり、集団と集団の利害を調整したりという場に立ったことがなくて、全体的な問題については誰かがよろしく取りはからってくれるということに慣らされてしまっているからだと思うんですね。最近の若者の傾向としてよくいわれる「評論家的態度」もこうした傾向のあらわれではないかと思っています。

サークルや同好会は集団としての目的や利害がはっきりしていますから、意見もまとまりやすいんですが、大学全体の問題、場合によっては社会全体の問題を議論するような場合には、もっと次元の高いところで自分たちの利害を考え、総意をかたちづくっていくことが求められる。ところが、学生の多くは、そういう抽象度の高い問題をしっかり受けとめ、考えるという訓練が足りないように思います。

ですから、今後もできるだけ、全学的な問題を学生に投げかけ、学生がそれを自分たちの問題として受けとめ、考えるように働きかけていくつもりです。それは学生を大人扱いするということからはちょっと外れますが、学生が学生時代にそういう思考の訓練を積んでおくことは、社会に出たときに、必ずや大きな力になると思うからです。

自分なりのテーマと目標をもって勉強してほしい

それはそれとして、すべての学生に共通の、いちばん大きな関心事は、いうまでもなく、教室での勉強でしょう。新任の教育担当副学長としても、大学をどういう学びの場にするかが最大のテーマだと考えています。

学生に求められるものも、大学に求められるものも、かつてとはちがってきていますが、しかし、究極のところ、大学を、学生が夢中になって勉強でき、その勉強によって自分にどんな力がどれだけついたかをきちんと自覚できる場にしたいという志向は、今も昔も、学生にとっても大学にとっても、変わらないものだといっていいでしょう。

そのために大学がなすべきことはいろいろ考えられますが、学生にとっていちばん身近なのはなんといっても先生方ですから、まずは先生方に頼んで、自分の講義ではどういう力がつくかということをできるだけ具体的に示し、かつ、受講した学生がそれをクリアできたかどうかもきちんと評価してもらうようにしています。また、選択科目がずらっと並んでいるだけだと、学生は面白そうな講義をつまみ食いするだけで4年間を終えてしまうことにもなりかねません。関連する複数の講義を1つのかたまりとして把握でき、テーマと目標をもって勉強できるような工夫が大切だと思います。これまで3年間6回にわたって、学生による授業評価を実施してきましたが、その自由記述に目を通してみると、学生が授業に求めているのは、その授業によって自分に力がついた、あるいは自分自身が変わったといった確かな手応えなんだなということがよく分かります。当初は、こういうことをすると先生が学生を甘やかすことになるんじゃないかという心配もあったんですが、学生はけっしてなまけたがっているわけではないんですね。手応えのない授業には手厳しい評価が寄せられている。そういう学生の声も踏まえて、今後はカリキュラムの改革などにも取り組んでいきたいと考えています。（談）

新入生へのメッセージ

社会科学の総合大学として トップノッチの最高の質を追求すべきだ

経営協議会学外委員
村上輝康氏 ●野村総合研究所理事長

社会コミュニケーション能力の向上が最優先になる

日本最初のシンクタンクとして設立された野村総合研究所（ＮＲＩ）に、設立直後に入社。以来35年以上にわたって知的なサービスを価値に変える仕事をしてきました。その間にＮＲＩは、大きく２回のビジネスモデルの転換を行いました。80年代にはシンクタンクからコンサルティングファームへ、90年代から2000年代にはトータルソリューション・プロバイダーへと脱皮してきたのです。

ＮＲＩは知的サービスをお金という有形の価値に変えてきました。一方、一橋大学は知的サービスを無形の価値に変えています。その意味では両者は似たような機能を果たしているわけです。そこで、私のＮＲＩでのさまざまな試行錯誤の経験を、経営協議会委員として役立てられればと思っています。

国立大学の法人化は、一橋大学にとって大きな契機といえます。少子化で減少する学生、限られた財源、激化するグローバル競争、情報技術革新……と大学を取り巻く環境が激変。大学経営にも、研究・教育の両面でのエクセレンスを競う、真のマネジメント能力が問われるようになってきました。

ところが、今回の変化でもたらされる、大学の自律性や自主性の裁量範囲は想像していたよりも狭いのです。しかも、６割近くの運営費交付金と約３割の授業料収入を安定的に持つことから、求められる経営の自己責任の幅も小さい。そこに安住すると、変化が切実に求められる時代にも拘わらず、何も変わらなくなってしまう可能性があります。

学内における裁量の幅は広がったわけですから、これを教育競争力強化、研究競争力向上の好機と捉えて、戦略的な取り組みを行っていくべきです。なかでも、「社会コミュニケーション能力」の向上を優先すべきだと考えています。経営者、官僚などとの双方向コミュニケーション、社会的発言、審議会活動、メディア露出……。社会科学の総合大学が社会との双方向性をなくしたら意味がありません。さらに、研究におけるグローバルエクセレンスの追求も重要になります。一橋は国際的にはまだ無名に近い存在です。照準をグローバルエクセレンスにおかなければ、世界といわずアジアでも、日本でも遅れをとってしまいます。

来るべき知識の時代には、大学で学ぶことの意味が問われる

一橋大学のレーゾンデートルは、社会科学に特化した専門高等教育研究機関として、トップノッチ、リーディングエッジの最高の質を追求し続けるところにあります。数少ない選ばれた学生に対して、商・経・法・社の厳選された社会科学領域において徹底したエリート教育ができる大学なのです。日本をどう引っ張っていくか。行動するエリート、実践するエリートが今ほど必要な時代はありません。さらに、すでに社会で活躍している卒業生や各界のトップノッチで活躍する人材の質を一層磨き上げるエリート再教育機関としても期待されます。

企業経営の本分は、「顧客価値の最大化」です。大学にとって顧客価値の創造とは何でしょうか。顧客イコール学生ではありません。もちろん学生は重要な存在ですが、それ以上に産業界、社会システムの変革・高質化など、社会全体を対象に顧客価値の最大化を真剣に考えなければなりません。

最後に学生の皆さんにひとこと。

工業の経済から知識の経済へ――経済自体も大きな転換期を迎えています。現在の学生が社会に出るころには、この動きはより明確になってくるでしょう。知識の時代には大学で学ぶことが、大きな意味を持ってきます。つまり、大学で身に付けた知識創造の基本的能力が直接問われるのです。新しい知識を自ら生み出し、実践していく能力が問われます。大学で学ぶことがそのまま、社会で活躍する際の素材となり、武器となるのです。

大学で学ぶことの意味を十分に理解して、社会に出てからも自分を再教育してもう一度鍛え直すことを意識していただきたいと思います。（談）

◆村上輝康（むらかみ・てるやす）

1968年京都大学経済学部卒業。野村総合研究所入社。72年ピッツバーグ大学公共国際問題修士。ロンドン支店駐在主任研究員、社会システム研究部長、技術戦略研究部長を経て91年研究理事、96年取締役新社会システム事業本部長。97年常務、2000年専務、01年代表取締役リサーチコンサルティング部門・国際部門・研究開発担当を経て02年４月より現職。著書・論文に、『ユビキタス・ネットワーク』『産業創発』『仕組み革新』『未来萌芽』『創造の戦略（日、英、西、韓語）』『Ubiquitous Networks:The New IT Paradigm』など。

各学部・研究科からの

Welcome Message

大学院商学研究科・商学部 ● 研究科長・学部長　山内弘隆

大学院経済学研究科・経済学部 ● 研究科長・学部長　田中勝人

大学院法学研究科・法学部 ● 研究科長・学部長　山内　進

大学院社会学研究科・社会学部 ● 研究科長・学部長　渡辺　治

大学院言語社会研究科 ● 研究科長　佐野泰雄

国際企業戦略研究科（ICS） ● 研究科長　竹内弘高

理論、哲学のバックボーンの上に、
高度な知識と実践的なスキルを構築してもらいたい

Welcome Message

大学院商学研究科・商学部

研究科長・学部長　山内弘隆

知識、技術の背景に しっかりとした哲学があること

一橋の商学部のルーツは、森有礼が開設した商法講習所にあります。商法とは商業の手法のことで、古くからビジネスに対して一貫した考え方のもとに教育を行ってきました。変動に耐えられる人材、現実を直視し産業の道案内ができる「キャプテンズ・オブ・インダストリー」の育成です。強調したいのは、その背景に理論、哲学があるということ。学生一人ひとりから彼らの持っているものを引き出し、知識、技術はもとより哲学という一本の柱を持った有能な人材を、輩出し続けてきたことです。

ＭＢＡコースというと、アメリカ流のプラグマティックなものをイメージする人が多いと思います。しかし、一橋では理論構築の方法を身に付けることを重視しています。ですから、古典講読などにも力を入れているのです。商学部教育は、昔から「読み・書き・算盤」に「哲学」の理解を重視してきました。ＭＢＡはその一つの典型といえます。

一橋大学は社会科学系の大学として、産業界に偏ることなく満遍なく人材供給を行ってきました。振り返ってみれば、重厚長大産業全盛時代にも金融業界などに優れた人材を供給しています。世の中で求められているのは何か？ 経営の本質とは何か？ を理解し、やりがいのある仕事を自分自身で見つけだせるような教育基盤を提供してきたのです。

高度専門知識を備えた 人材を養成する

産学連携を実践しているのも特徴です。商学部では平成17年度、２つの企業と２つの公益法人から御寄付をいただき、専門の教育と研究の両面を推進しています。それから、イノベーション研究センター。理論と実践をつなぐ架け橋として知財立国日本の礎となることを目的として、企業人とのタイアップ研究を進めています。21世紀ＣＯＥプログラム「知識・企業・イノベーションのダイナミクス」で設立した日本企業研究センターでは、産学連携を実現する土台づくりを行っているといってもいいでしょう。さらに丸の内に情報交換の場となるサテライト「丸の内産学連携センター（ＨＣＣ）」を開いて産業界との物理的接近を図っています。

平成12年度より学部教育と大学院経営学修士コースを連携させた「学部・修士５年一貫教育プログラム修士コース」を、16年度からは「学部・修士５年一貫教育プログラム（博士進学コース）」を設定しています。このプログラムでは５年間で学士号と修士号の両方が取得できます。

現在、理工系では修士課程に進むことが普通になっています。しかし、10～15年前は学部卒で就職するのが普通でした。現在の商学部がちょうどそのころの理工系の学部の状況とよく似ています。まだ社会科学系のマスターの社会的認知度はそれほど高くはありません。その溝を埋めるのが５年一貫教育といえます。高度な知識と実践的なスキルを同時に身に付けることが要求されるようになってきた現状に対応した、先駆的なプログラムといえるでしょう。

一橋の学部教育は社会的に評価をされていると思いますが、ＭＢＡの評価はこれからです。それは、卒業生の社会貢献により社会全体が一橋のＭＢＡをどう評価するかが決まるからです。ただ、ＭＢＡコースのプログラムは一橋大学が一から総力を挙げて築いてきたものであり、教育内容は誇れるものであるということは言えます。優秀な学生が多いわけですから、ブランドに寄りかかるのではなく、自らブランドを築き上げていく気概を持ってもらいたいと思っています。

研究者養成という面では、ゼミの伝統が強みを発揮しています。少人数の寺子屋的な一貫した研究者育成を行っているのです。ゼミの単位はさらに小さくなってきており、学生と緊密な関係で教育を行うといういい流れが生まれています。

実践的なＭＢＡ教育が、社会的に熱望される時代です。研究者も現実社会を見る視点の鋭さが求められています。それを前提として研究していく必要があります。商学、経営学系の学問はスキルに流されがちです。だからこそその背景に理論、哲学が必要なのです。（談）

経済学の不易流行をにらんで、
経済学で自分の付加価値を高めてほしい

Welcome Message

大学院経済学研究科・経済学部

研究科長・学部長　田中勝人

経済学を道具として現実の経済を分析し、自分の言葉で語る

経済学を学びたいという明確な意識を持っている学生には、初心を忘れずにその気持ちを持ち続けていただきたいと思います。経済学には司法試験や公認会計士試験のような直接関連する国家試験はありません。そこで、勉強の動機付けに苦労する学生が少なからずおります。しかし、社会に出て活躍している卒業生が一様に口にするのは、「学生時代にもっと経済学を勉強しておけばよかった」ということです。一橋大学卒というブランドだけでは、社会では通用しません。個人個人が学生時代にどのくらい自分に付加価値を付けることができるかが、問われているのです。

さらにいえば、かつては金融機関への就職は経済学部など文科系卒業生の独占市場でした。しかし現在では、金融ビジネスでは高度な数学的知識や工学的知識が必要となってきたため、理科系卒業生が数多く参入しています。国家試験はありませんが、ある意味ではもっと厳しい競争が生まれているのです。ほかにも官公庁や国際機関、民間シンクタンクなどのさまざまな分野で、広い意味での経済に関する高度な能力が要求されるようになってきました。5年一貫教育の導入は、こうした現実に対応したものです。

大学院生についても同様です。修士課程の学生には、経済学を道具として現実の経済を分析し、自分の言葉で語れるレベルまで到達してもらいたいと思っています。博士課程に進学する学生には、それぞれの分野で蓄積された研究成果を踏まえて、それを乗り越えるような独自の研究成果を生み出してもらいたいですね。学問の世界は、グローバルスタンダードです。つねに世界レベルを意識して、研究を進めてもらいたいと思います。

経済学は時代の文脈とともにアクティブに変化する

経済学は、ファンダメンタルな分野である経済理論に代表されるように理論的な体系が出来上がっていて、非常にアカデミックな側面があります。その反面、人間と社会を対象とする社会科学の宿命として、時代の文脈を反映して時代とともに変化してもいるのです。

例えば、地球温暖化や生態系の破壊などの地球環境問題。これらを解決するためには技術的な視点だけでは不十分です。その背景にある社会的・経済的要因を明らかにして、大局的な視点で分析する必要があります。こうした文脈から生まれたのが、「環境経済学」です。ほかにも、少子高齢化、福祉、年金などの諸問題を考察する「医療経済学」が注目を集めています。こうした新しいテーマも、重要な研究教育分野なのです。

金融分野でも変化が見られます。経済のソフト化という時代の追い風を受けて、「数理ファイナンス」「金融工学」などとして発展してきたのです。これらは従来のフレームワークでは不十分だった金融時系列の価格変動を解明するのが目的。当然、高度な確率論や統計学の知識が必要になります。

アメリカの同時多発テロやイラク戦争に象徴されるように、現代文明は新たな挑戦を突きつけられています。宗教、グローバリズム、市場経済、差別と貧困など、さまざまな問題がその根底にあるのです。こうした問題にも、事実関係を深く掘り下げて、経済的な観点、社会科学的な観点から教育・研究を行っています。

このように経済学は非常に多くの分野から成り立っています。そこで研究教育のカリキュラムは、入門、基礎、専門レベルへと段階的な編成になっています。最初から手取り足取り指導することは、学生が主体的に学ぼうという姿勢を妨げるものです。重要なのは学生が自立するのを側面からサポートすることだと考えています。学生には学んでいく過程で抱いた疑問や発想を教員にぶつけて議論することを期待しています。それは教員にとっても触発されることが多く、双方にとって有意義だからです。

なお、学業や課外活動などで顕著な成果を上げた学生には、経済学研究科が表彰する制度を用意しています。努力することのインセンティブを高めることが狙いです。（談）

法曹、国際関係、研究……コースはさまざま。
早くから目的意識を持ってもらいたい

大学院法学研究科・法学部

研究科長・学部長　山内　進

法律を扱う人材としての スタイルと精神を身につける

従来の法学部入学者は、司法試験を受ければ法曹界に行けるといった意識を漠然ともって入ってきた人が多かったといえます。やがて、司法試験の難しさを実感し、他にも道があることにも気が付いてきます。こうして、最後まで法曹を目指す人は必ずしも多くはありませんでした。ところが法科大学院ができて、これまでより高い確率で法曹界へ行けそうだということになりました。法学部 - 法科大学院 - 法曹界というキチンとしたルートができつつあるのです。それだけに、以前よりは法曹志向が明確な学生が増えてきました。

法科大学院の合格者をみると、法律を学んだ既修者と未修者の比率は約７対３です。そして既修者の約５割が一橋の法学部出身者です。法曹界志向の学生にとってはギャンブル的な要素が減り、キャリアプランを立てやすくなりました。やがて、一橋の法学部出身者のかなりの部分が一橋を中心に全国の法科大学院に進学するようになるでしょう。

一橋の法科大学院の特徴は、

①ビジネス法務に精通した法曹

②国際的な視野を持った法曹

③人権感覚に富んだ法曹

の３つの理念を身に付けた専門家の育成を行っていることです。実務的な内容をかなり含んでおり、司法試験と結び付いて法曹を育てるために重要な役割を果たしています。

学部では、問題を解決するための知的な訓練を行い各種ツールを提供します。法律の文言ばかりでなくそのスタイルや精神を身に付ける。そうしてはじめて、法律という根拠を正しく使うことができるようになるのです。さまざまなケースの中で判断できるような引き出しをたくさんつくり、何かあったときにはすぐに閃くようになってもらいたいのです。さらに、専門的な勉強ばかりでなく語学やパソコン、各分野の知識などの教養を幅広く身に付けてもらう必要があります。

法科大学院COE、21世紀COEプログラム、国際政治学会事務局 倫理観ある法曹の育成と高水準の 国際関係を研究する土壌を有する

平成16年度法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム（いわゆる法科大学院ＣＯＥ）に「科目横断的法曹倫理教育の開発プロジェクト」が採択されました。学部でも法曹倫理の基礎を育む必要があります。そのベースのうえに、あらゆる科目の教育を通じて法曹倫理を養うという大胆で壮大なプロジェクトのもとに実践に直結した応用的な教育を法科大学院が行うというものです。なお、大学院入試で英語を重視していますが、研究場面でも英語の比重は高くなります。

教育と研究とは密接に結び付いていますから、研究者を目指す場合でも、学部 - 法科大学院 - 博士課程といったルートが当然になってきます。なお、平成16年度の21世紀ＣＯＥプログラムに法学研究科の「ヨーロッパの革新的研究拠点」が採択されましたが、博士課程以上の若手研究者育成過程のひとつとして、ＣＯＥフェローとして研究できる環境を整えています。

一橋大学法学部は、現代社会の具体的課題の発見と解決、そして国際的な視野を持った人材の育成や社会との連携を、研究と教育双方で推進するのを目的としています。

入学時の学生の希望では、重複を含めて約９割が法律関係、約２割が国際関係の勉強をしたいとしています。国際関係を軸に考えると、国際政治学会の事務局が置かれていたり、21世紀ＣＯＥプログラムに中心的に取り組んでいることからわかるように、一橋大学法学部のレベルは高く、そこに特徴があります。

2005年には、経済学研究科との協力により「国際・公共政策大学院」も開設されます。法学部 - 国際・公共政策大学院というルートで専門性を深め、キャリアを磨く準備をすることができるようになるわけです。

目的を持って勉強しようという学生には、さまざまなコースが用意されています。それだけに、早くから目的意識を持って自分のキャリアを考えてもらいたいと思います。

これまでも卒業生は、裁判官、検察官、弁護士といった法曹界や国家・地方公務員、企業など、各界で活躍してきました。これからは、法や国際関係の専門知識を武器に、国際機関や国際ＮＧＯ、マスコミ、企業の法務部など、その活躍フィールドはさらに広がっていくでしょう。（談）

自分で道具を選び出し、自分の頭で社会現象を切れるようになる学問

Welcome Message

大学院社会学研究科・社会学部

研究科長・学部長　渡辺　治

深く、高レベルの学問を行うために研究の裾野を広げる

国立大学で社会学部をもっているのは本学だけです。一橋大学は社会科学の総合大学を標榜していますから、社会学部はその象徴的な学部といってもいいでしょう。

学部の学生にも大学院生にも共通するコンセプトがあります。タテ糸となるのが社会現象を色々な視角から「切れる刀」を研ぐ仕事です。社会学部・研究科では社会現象を本格的に掴んで分析し、処方箋づくりを行う深い専門の学問を体系的に整えています。社会学、社会調査、哲学、社会思想、心理学、地理、人類学、政治学、教育社会学、社会政策、歴史……。学生、院生はそのうちの１本の刀を選んで身につけます。しかし、それだけで料理するのは難しい。社会現象を深く掘り下げるのに「ふさわしい刀を自分の裁量で何本か組み合わせて使えるようにする」のが、ヨコ糸です。

そこで、こんな欲求を持っている人には、社会学部は最適です。まず、現代社会の問題に強い関心を持っている人。例えば、ニートを取り上げてみても、社会学、社会心理学、雇用政策、教育学など、さまざまなものを動員しなければ解くことができません。学生諸君は色んな刀を学ぶことで、いくらでも幅を広げたり、掘り下げていくことができます。

次に、マスコミや国際的に活躍したいと考えている人。タテ糸として「マスコミ論」などの刀がありますが、同時にマスコミで戦えるにはヨコ糸として、教育、社会、労働なども学ばなければなりません。修士課程まで進んでタテとヨコの力を付ければ、即戦力として活躍できる人材になれるでしょう。

勿論、一つの学問を深く学びたいという学生には、水準の高い学問を提供しています。優れた研究者を養成するための環境を提供しているのです。本学部は文学部などとはひと味違ったディシプリンを持っています。社会学部の特徴は、前述のように研究の裾野を広げさせること。大きな研究、深い学問をやっていくためには、広い裾野が必要だからです。キチンと学べば、自分で道具を揃えて、自分の頭で、社会的現象を切ることができるようになります。

先端課題を設定し、問題意識を養う

これからの社会や企業が求める人材は、自分で問題を見つけ出し、必要な道具を自分で揃えて切っていけるような人です。現実の問題は、この刀を使えばよいと答えがあるわけでもなければ、既存の刀で切れるとも限りませんから……。この実践的な能力を身に付けるのがこの学部なのです。

大学院では、２つのタイプの学生を養成します。まず、深いタテ糸を追求して「切れる刀」を身に付ける研究者タイプ。もう一つは学部では身に付けられなかった能力をプラスして磨いていくタイプです。その両者の要求に応えています。

具体的には、総合社会科学専攻が、高度知識社会の要請する、高度な学識を持つ社会人と研究者を育成することを目指すタテ糸型です。そして、地球社会研究専攻は、地球規模の幅広い課題群に積極的に取り組もうとする人たちに開かれたヨコ糸型になります。社会との関連が深い地球社会研究専攻がさまざまなディシプリンを越えてボールを投げかけることで、総合社会科学専攻に刺激を与えることができます。

ユニークなのは、研究と教育をドッキングした「先端課題研究」を展開していること。例えば、「企業社会日本の変貌」というテーマで、企業や政治、家族、教育などの変化について、異なる学問領域を専門とする教員と大学院生が共同して研究し、分析能力も身につけようという学際的研究教育プロジェクトです。このプロジェクトでは、さまざまな領域の先端的な研究成果に触れることができるだけでなく、問題志向的・課題志向的な研究の進め方、リサーチ・ワークや分析、プレゼンテーションの方法などを実践的に学ぶことができます。その成果は、刊行物として発行します。

日常的に、問題をジャーナリスティックに理解するだけでなく、新聞やテレビなどを素材にしながら分析していく姿勢が必要です。社会現象に絶対的な解はありません。自分の努力で解いていくしかないのです。社会学部は、その道筋を導き出す方法を提供してくれる学部なのです。（談）

「知的なアリーナ」での対話、
討論を通じて、
自分を鍛え上げていく悦び

Welcome Message

大学院言語社会研究科

研究科長　佐野泰雄

教養は批判力、判断力を養うための有効なツール

教養教育は、日本の教育界全体が抱える大きな問題であり、大学だけでなく中・高も含めた再構築が焦眉の急といえます。大学院言語社会研究科の教員は、全学共通教育の枠で教養教育を学部でも担当していますから、この問題には大きな関心と危機感を持っています。

学生諸君に必要なのは、深く静かな批判精神です。そして、「教養」として括られているさまざまな知は、そうした批判精神を形成するためのツールなのです。これを教育機関においてカリキュラムの枠内で伝達しようとすれば、現在のようなアラカルトな履修形式よりも、ある程度パッケージ化されたものを複数の定食メニューから選択させる形を採った方が効率的でしょう。それを学生諸君が、知的なストックとして自分の中に備蓄していくのです。ツールとなるべき教養の代表的なものが古典です。かつて、どのような問題が、どのように論じられていたかを知ることで、問題解決のひとつのガイドが示されるからです。

もちろん、そのようなパッケージを学生諸君に、ただ与えるだけでは意味がありません。そこから得た知見をヒントとして、現代の個別の問題に対する見方を深め、成熟させるようガイドしていくことが重要となります。ゼミなどでの発表、討論、意見交換といった「知的なバトル」を通じて、自分の知的判断力を鍛えていくこと。大学は、「知的なアリーナ」であり、そこで自分の知力を鍛錬するのだ、というハードな目的意識が、教員と学生の双方に必要です、特に現在のような危機の時代にあっては。

社会的・歴史的な広がりを持つ言語や作品を素材に、社会と人間を思考する

言社研では、ひとつの社会において生産される作品の研究、あるいは、個別の言語の社会的・歴史的な特質の研究を軸とし、言語と社会に関わる人間の問題を深いレベルで扱います。

一方、教育機関としての言社研の使命は、いわば教養の専門家である人文科学系研究者の養成ですが、高度専門職業人の養成もそれに劣らず重い責務である、と捉えています。言社研には、英語専修免許取得プログラム、日本語教育学位取得プログラムなどの教員系専門職教程、学芸員資格取得プログラムなどの文化事業系専門職教程がありますが、高度専門職業人養成とは、なにもこうした固定的なキャリアに限定されるわけではない。自己との、そして他者との静かで深い知的なバトルによって自己を不断に鍛え上げていく力能こそ、高度専門職業人に不可欠な資格です。歴史の浅い言社研ですが、教育、マスコミ、出版、宣伝などの方面にそうした人材の供給実績を持っています。（談）

時代が必要とする
世界水準の
プロフェッショナルを輩出する

Welcome Message

国際企業戦略研究科（ICS）

研究科長　竹内弘高

理想の環境で「Captains of Innovation」を育成

いま時代は、プロフェッショナルを必要としています。その理由は明白。急速なグローバル化とＩＴの高度な発展が社会や経済にもたらした大きな変化に対応し、イノベーションを推進していくことが、企業が勝ち残る条件となっているため。即戦力として問題解決できる、高度な専門知識と実践力を兼備した人材が不可欠だからです。日本最初の専門大学院として発足したＩＣＳは、こうした社会の要請に焦点を絞り込み、市場価値の高い、世界に通用するプロフェッショナル人材の育成に注力しつづけています。学生25人に教員１人という少数精鋭の手作り教育を推進、競争戦略論やナレッジマネジメントなど時代に対応する理論や思考力と、未来のエグゼクティブに必要なビジネススキルの両方を修得できる優れたカリキュラムで高い評価を獲得。ＭＢＡプログラムは、日本人対象のアンケートでハーバード・ビジネススクールを抜き世界第５位、在校生の満足度ではナンバー１にランクされました*。世界のビジネスセンター、東京・大手町に隣接する好立地、多くの留学生が集うグローバルな土壌をもつＩＣＳは、日本にいながら欧米・日本・アジアそれぞれの最先端を学べる理想の場。この恵まれた環境をフルに活かし、次代の企業経営のリーダー、「Captains of Innovation」が次々と巣立っていくと確信しています。

日本発のイノベーションを世界に発信

ＩＣＳには「国際経営戦略コース」「金融戦略コース」「経営法務コース」の三つのコースがあり、各コースの目的に応じた特徴的なカリキュラムを実践しています。例えば、「国際経営戦略コース」は、世界のビジネス・リーダーと互角に渡り合える資質を磨くため授業はすべて英語で行っています。「金融戦略コース」では激変する金融環境を先取りした戦略性の高いカリキュラムを用意、「経営法務コース」ではコンプライアンスや知的財産権など最先端の法のあり方を視野に入れた授業を実践しています。また、金融戦略コースと経営法務コースのジョイントによる「再生ビジネスプログラム」を実施するなど、企業経営とビジネスのいまに鋭く迫るカリキュラムは、世界のトップレベルにあると自負しています。

ＩＣＳの各コースは社会人経験が前提ですが、これも企業やビジネスの現実を知った上で専門知識・スキルを修得することが、プロフェッショナルへの近道だから。学部生であれば、将来の進学を視野に入れた設計ができるということです。閉塞感が指摘されている日本ですが、モノづくりのノウハウや技術、世界の熱い注目を集める多彩な「コンテンツ」等々、日本にはまだ豊かな資産が豊富に存在しています。その資産を駆使し、日本発のイノベーションを世界に発信するプロ中のプロが育つことを心から期待しています。（談）

*国内外のビジネススクールの卒業生、在校生、志願者の交流組織「MBA友の会」会員による投票結果。2004年秋実施。「THINK！」誌 2005WIN「No.12」

特集

『橋人皆漕』

一橋大学にとって
ボートは特別な意味を持っていた

一橋大学のひとつの象徴が兼松講堂だとすると、
もうひとつの象徴が戸田艇庫といえる。それは戸田艇庫が
単なるボート部の施設という以上の存在だからである。
例えば、「橋人皆漕」というキーワード。
初めて聞く人は「おや？」と思うだろう。
「そんなはずはない」と一笑に付す人もいるかもしれない。
例えば、平成16年度の戦績。
商東戦エイトで６連覇は逸したものの、全日本のＭ４×で３位、
インカレのエイトで６位、全日本新人選手権Ｍ２×で優勝…。
ボートに興味のない人でも誇らしく思える成績だろう。
だが、それだけではない。
ボート部の歴史から一橋に連綿として流れる精神文化に触れると、
大学に対する見方が変わってくるはずだ。
そのツールが、戸田新艇庫竣工、橋人皆漕、一橋ボートの源流、
スポーツマンシップと武士道精神、商東戦、
ＨＣＳ制、四神会の７つのキーワードである。

戸田新艇庫竣工

2004年８月、建て替え工事が進んでいた一橋大学戸田艇庫が竣工した。一橋大学重要施設改修基金募金会の拠出によるもので、４代目にあたる。ＯＢ会が建物を建てて大学に寄付するということは他大学ではあまり例がなく、大学に数ある施設の中で艇庫が兼松講堂と並んで重要な位置を占めていることがよくわかる。2004年８月９日に行われた竣工式での挨拶（要約・下記掲載）にも、艇庫に象徴されるボート部への思いがよく表れている。

「文部科学省に改修を頼んでも予算がつかないことにより、それなら自分たちでやろうということになり改修が決まったものです。本件は単にいちボート部の艇庫という位置付けではなく、我々一橋人の心のふるさとでもある学外施設の改修ということで決定したものです」(募金会・高橋宏副会長)

「一橋大学において特別な意味と位置付けを持つ『漕艇』のための素晴らしい施設が出来上がったことを大変うれしく心強く感じます。艇庫の完成が一橋端艇部の一層の発展につながり、それが一橋大学の名をいよいよ高からしめることを当然に期待します。さらに大学としては、すべての学生が利用する全学的な施設としてこの艇庫を活用することを考えています。艇庫という有形の資産が『一橋をいいなと思う気持ち』という無形の資産を生み出すよう、有効に活用する所存です」（杉山武彦副学長：当時）

「この戸田艇庫は大学の課外活動の拠点、換言しますと『橋人皆漕』の場でありますから、ひとり端艇部の活動の拠点に止まらず一橋大学全ての関係者が等しくオールを手にすることにより、ウォーターフロントキャンパスとして活況を呈することが期待されます。また、広く国内、海外のボート関係者との貴重な友好交流の機会を提供する場にもなります」（四神会・鈴木崇司副会長）

単なる課外活動の施設ではなく、橋人皆漕の場という位置付けなのである。

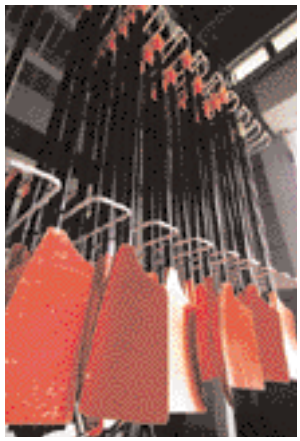
橋人皆漕

橋人皆漕―― 一橋大学の学生はみんなボートを嗜む。この言葉に象徴されるようにボート部は、一橋大学の学生にとって今なお存在感のある存在である。それは、一橋大学の長い歴史において、一橋大学のシンボルとして求心力を発揮してきたからといえる。

明治35年、後述するＨＣＳ制の校内対抗レースが導入された。

改修前の戸田艇庫

新しく生まれ変わった戸田艇庫（地上４階建て）



最新機器を揃えたトレーニングルーム

さらに、この時期に学生の自治組織である一橋会が設立された。これは、運動系、文化系の各部を一橋会の下に統合しようというもの。その際、一橋会は端艇部（ボート部）員から成ることが定められた。ちょっと不思議に思われるかもしれないが、当時はすべての学生がＨＣＳのいずれかの組に属しており、当然のことだったのである。まさに、「橋人皆漕」の制度的確立である。以来、輸入されたスポーツとしていち早く取り入れられたボートが、名実共に一橋の校技となった。

なお、かつてのボートマンはスポーツのゼネラリストが多く、大正11年ラグビー部を創成したキーメンバーにもなるなど、一橋のスポーツ隆盛をリードしてきた。

さらに、一橋ボートの源流をたどると、ボートが一橋のシンボルたるゆえんが見えてくる。

一橋ボートの源流

一橋ボートの源流は、「開成学校」（東京商業学校（明治18年当時）と合併する東京外国語学校の前身：東大の前身でもある）にまで遡る。イギリス・イートン出身の英語教師ストレンジが、英語教授のかたわら学生に熱心にボートを教えたのが、わが国の学生ボートの始まりであり、一橋ボートの始まりなのである。ほかにも、ウエストやノットがイギリス式ローイングを指導していたことが記録から推測される。

なお、初の学生ボートレースは、明治17年10月にストレンジとノットが舵手となり、向島で１マイル以上のイギリス式模範レースを行ったものである。

一橋ボートは、ストレンジの説いた精神性を色濃く受け継いでいる。それは、スポーツマンシップと武士道精神の融合である。

スポーツマンシップと武士道精神

『ボート百年』（宮田勝善著）によると、ストレンジの指導方針は、技術より精神に重きを置き、とりわけスポーツマンシップを強調したという。例えば、「スポーツで最も大切なことは、互いにベストを尽くして戦うことで、勝敗は問題ではない」「スポーツの究極の目標は、情意の鍛錬で、筋骨の練磨はその手段にすぎない」と語っている。さらに、「レースに勝ったときは、必ず『ウエル・ロー（よく漕いだね）』と言って相手をいたわれ」と説いている。

明治期に急速にボートが普及し始めたのは、ひとつには世界の列強に追いつこうという強烈な意識が蔓延していたという時代背景がある。ボートは「隅田川はテームズ河に通ず」という文明開化の象徴でもあったのだろう。

そのうえに、ストレンジが強調するスポーツマンシップ、ジェントルマンシップの精神が、学生たちの秘めていた武士道精神や士魂商才といった高邁な精神主義とシンクロナイズしたといえる。なお、明治18年に東京外国語学校が一高と東京商業学校に分割されたとき、２隻のボートもそれぞれに移されたと記録されている。

学生ボートの歴史を振り返ると、ストレンジという若いイギリス人教師の手ほどきによって始まったことが分かる。商東戦の激しい対抗意識は、源流を同じくする「兄弟」ゆえのものといってもいいかもしれない。

商東戦

明治20年４月、東京帝国大学の向島艇庫が完成。その落成式と新建造の４艇の進水式を兼ねて競漕大会が開催された。そのレースの一つとして文部省直轄校レースが企画され、第一高等学校、高等師範学校と並んで高等商業学校（明治20年で改称）が招待されたのである。この三校競漕が、わが国初の正式な対校レースである。結果は、抜きつ抜かれつの大接戦だったが、力及ばず３位となった。

翌21年には高師が抜けて、高商・一高の対校競漕となり、商東戦（一橋大vs東大）へと発展していく。商東戦の戦績はここのところ好調で、平成16年度は惜敗したが、11年度から15年度までは５連覇を遂げている。

ちなみに、第１回校内競漕大会を開催したのは、初の対校レースが開催された明治20年の11月。これがやがて縦割り組によるＨＣＳ制へと発展していく。

HUBC

HCS制

校内競漕大会はスタート以来、学年対抗形式をとっていた。このスタイルだと本科の２年、３年に有利で経験の浅い予科はどうしても不利になってしまう。ほかにもいくつかの問題があったことから、明治35年から学内を縦割りにしてＨＣＳの３クラスとした。これは、高等商業学校（Higher Commercial School）の頭文字を取ったもの。同時に、紫紺に金文字のマーキュリー・マークを刺繍した大優勝旗を制定した。その延長線上に、現在行われている春のクラスチャンピオンシップ水上運動会（クラチャン）と秋のボート部のＨＣＳ競漕がある。

その発展の背景には、ボート部のＯＢ会である四神会のサポートがあることを忘れてはならないだろう。

四神会

古く中国では東西南北に、青龍・白虎・朱雀・玄武の４つの神を配していた。明治22年に６人漕ぎの４隻の新艇を進水した際に、一橋では各艇にこの四神の名を冠したのである。現在でもこの名はシェルエイトの命名に用いられている。さらに、一橋端艇部ＯＢ会も「四神会」と名付けられている。

もともと四神会は、対校選手やマネジャーなど幹部が親交を深める集まりとして発足した。新艇造船の際などには中心となって寄付を集めたわけだが、当時は実業界に支持者が多く奉加帳を回す程度で済んだという。

ところが、昭和30年代になると物価高騰、部活動に伴う経費急増でボート部の財政は逼迫してきた。そこで、他部の部長なども含めて四神会拡充運動を展開。寄付を仰ぐばかりでなく、その会費をもって充当しようということになった。校内競漕大会など橋人皆漕体制により、みんなボートに深く関わりがあるという発想からである。

ボート部のＯＢ会である四神会の歴史をみても、いかにボート部が存在感を発揮してきたかがよくわかる。

なお、今回の戸田新艇庫竣工に向けて、四神会は会員の８割強の賛同を得て、総額１億1000万円強の改修募金を拠出している。

＊参考資料：『一橋ボート百年の歩み』（編集・発行：四神会）

『橋人皆漕』

一橋端艇部部長
林　大樹
社会学研究科教授

ボート部は若者をリーダーに育てる鍛錬のよき道場

19歳でボートに初めて触れて以来、現役時代、卒業後、教員、そしてボート部長として、約30年間ボートと関わりをもってきました。現役時代には見えなかったものが今、見えるようになってきました。

現役時代は戸田にあって、ボートしかありませんでした。ボートにドップリと漬かっていたのです。今部長となって、改めていかに多くの人の協力によってボート部が成り立っているかを実感しています。

現役時代は、選手としていい成績を上げたいとつねに考えていました。その前提に、艇を走らせるという目標がありました。スーと走れるとそのこと自体が心地よいのです。しかも、自然にスピードが出るようになってきます。それに向かって集中していました。選手の立場で、相手の立場をあまり考えずにマネジャーに要求を出したものです。

教員になってからだんだんと、ボート部のマネジメントに関心を持つようになりました。ボート部は多くの人に支えられて成り立っています。勝ち負けだけでなく、いかに組織がうまく機能し、支えてくれる多くの人を喜ばすことができるかと考えるようになってきたのです。

大学にとって重要なのは、社会や企業のリーダーとなる若者を育成することです。そのための道場は、ゼミをはじめ大学の中に数多くあります。ボート部もこうした鍛錬の場のひとつなのです。勝ち負けばかりでなく、継続的に若者をリーダーに育てるよい道場なのです。

マネジャーは、ボート部のマネジメントを意識的に行うことで、いろいろな勉強ができます。ファイナンス、コミュニケーション、ネゴシエーション、リーダーシップなど、さまざまなスキルを身に付けられるのです。ボート部で組織人として鍛えられるのです。それだけに、先輩たちが培ってきたノウハウを継承してほしいと思っています。（談）

新人戦ダブルスカル
金メダル

2005年世界選手権
日本代表

原田芳宏
経済学部２年

自分の頑張りが大学のイメージにつながる
一橋生であることの誇りを胸に、漕いでいます

中・高と6年間野球部に所属していました。それまで運動と勉強を必死に頑張ってきた分、大学では少しのんびりしたい、体育会へ入って本格的にスポーツをするなんて考えもしませんでした。そんな僕をボート部へ導いたのは、あるボート部の先輩の一言でした。「ボートはお金がかかるスポーツ、設備の整った一流の大学でしか経験できないんだ」、妙に説得力がありました。加えて一橋大学のボート部は伝統と実績があり、大学から新しく始めても、努力次第で経験者を集めた有力私大に、レースで勝つチャンスがある、全日本クラスで優勝できる可能性がある、ということも魅力に感じました。

ボートとは、自分との戦いである。これは僕がボートを始めて素直に感じたことです。練習は厳しいですが、一度水の上に出してしまえば、岸にいる人に感覚はわからない、自分だけで考えないといけないのがボートというスポーツです。100%自己管理の世界なのです。どうすれば一秒でも速く漕げるのか？ そのためにはどうすれば良いのか？ 常に自問自答することが成長につながるのだと思います。体が決して大きくない僕が誰よりも速く漕ぐにはどうしたらいいのか？ いつも自分に問いかけていました。長い間漕いでみてようやく見つけた答えの一つが、ストローク数を増やすことでした。人が10回漕いでいる時に自分は11回漕ぐ。そうすることで体格的なハンディを埋めようとしました。そんな練習の甲斐あって、新人戦では金メダルを取ることができました。

僕は今年の世界選手権の日本代表に選ばれたのですが、世界クラスの選手と触れ合うことで得られる知識や感覚を、自分だけでなく他の部員とも共有して、強い一橋のボート部を全員で作っていきたいです。ＯＢ達が紡いできた伝統の担い手として、創部120周年の今年、一橋大学ボート部が新たな歴史を刻めるよう期待とプレッシャーを力に変えて今後も頑張って行きたいと思います。（談）

ボートは世界の共通語、そして人生の友
生きる楽しみと生き抜く力を高めつづけてくれます

秋山健一郎
みのり経営研究所代表取締役
昭和47年商学部卒
平成12年～平成14年ボート部監督

文武のバランスが取れてこそ人格形成ができる

学生時代から現在まで、私の人生の傍らにはいつもボートがありました。私が入学する前年、一橋大学のボート部は全日本で優勝、日本一になれるクラブに入ろうと思ったことが、ボート部に入部したキッカケの一つ。文武のバランスが取れてこそ人格形成ができると考えていたことも入部の動機でしたね。在学中は残念ながら全日本選手権の決勝には行けませんでした。しかし決勝に行きたかったという思いはずっと持ちつづけていて、それがのちにボート部の監督を引き受けたことにつながっていると思います。

卒業後は商社マンとして世界を飛び回りましたが、滞在したフランスでは地元のクラブに参加しました。ヨーロッパでは自然をそのまま生かした川や湖などボートを漕げる場所が多く、そこにさまざまな年齢・職業の人が集ってボートを楽しんでいます。外国人でもボート仲間としてすんなり溶け込め、それが外国での暮らしをより豊かにしてくれました。また、ビジネス上でも「学生時代ボートをやっていた」ことは、一種のパスポート的な効果がある。ボートは世界の共通語だとつくづく実感しています。

伝統とは、時代にあわせて進化する力

平成12年から14年までボート部の監督を務め、改めて大学におけるボートの意味を考えさせられました。ご存じのように一橋大学のボート部には長い伝統があり、それだけに伝統へのこだわりが強いのです。でも、伝統とは本来、時代に合わせて変わっていく力であり、新しい時代のなかで生きつづけることを可能にする原動力です。内向きの伝統に閉じこもるのではなく、世界に広く目を向け、世界に通用する技術や大学におけるクラブのあり方を考えるべき時期にきているように思います。メルボルン大学との提携を模索して、同大学のヘッドコーチであったプロのコーチの指導を得るためにオーストラリアに部員を送り込んだことは、その試みの一つ。キッチリ時間を守ること、短時間・集中を徹底した練習法、そして何より「ボートを楽しむ」姿勢を大事にするコーチングのあり方等々、貴重な示唆をたくさん得ることができました。

約40年ボートを漕ぎつづけて思うのは、ボートは贅沢かつ奥の深いスポーツだということです。自然のなかで水と語り合う時間は、異空間に過ごす贅沢な時ですし、人と人との深い絆というもう一つの贅沢を与えてくれます。自分の限界までがんばる努力は集中力と精神力を鍛えてくれるとともに、アタマを柔らかくし、人生を楽しむ前向きな生き方へ誘ってくれたように思います。私にとってボートは人生の友。もちろん、これからもボートを楽しみつづけます。（談）

特集

一橋的キャンパスライフ

かなりハードな勉強をして大学に入学した。
さあ、これからどうしよう？
大学入試を最大の目的としていた人は、
大学入学が決まった途端、目的喪失感から戸惑ってしまうことが多いようだ。
だが、一橋生の多くはちょっと違う。
一橋的キャンパスライフを楽しんでいるのである。
もちろん大学生らしく？　学問に専念している人もいる。
だが、キャンパスライフはそれだけではない。
キャンパスライフを通じて、一生涯の恩師や友人に出会い、楽しみながら、
時には苦しみながら自分のさまざまな可能性に挑戦する。
伝統のゼミも学生生活にはかかせない。
一橋のゼミは、単に学問を伝授する場ではない。
学問を介して教員や学生同士のコミュニケーションを深め、
洞察力を磨き、人間としての幅を広げていく道場なのである。
楽しみながら自分の可能性に挑戦するステージとしては、
クラブやサークルなどが重要な柱となる。
活動を通じて学内外の友人を増やし、
企画・計画・実行の過程ではさまざまなスキルを身につけられる。
実際に、一橋の多くの学生はクラブやサークル活動を満喫している。
約９割近い学生が、何らかの課外活動を行っているらしいのである。
「らしい」というのは、大学当局が把握している、
いわゆる公認組織として届け出のあるクラブの構成員だけでも
相当数学生が参加しており、
それ以外にごく仲間内レベルのサークルがあるからである。
では、実際に学生はどのような課外活動に参加しているだろうか？
その概要をイメージしていただくために、
いくつかの団体を束ねている組織に話を聞いてみた。

Campus Life

新入生歓迎委員会

一日も早く大学生生活に慣れてもらうために様々なイベントを企画し、新入生を迎えます

新入生歓迎委員会委員長
関　将宏 社会学部１年

学生主導で全てのイベントを企画・運営するのが一橋流

大学生活のスタートを前に、新入生のみなさんの胸のなかには「一橋生になった」という喜びや将来への希望、そして「授業や単位は大丈夫だろうか」「勉強とサークルが両立できるか」などさまざまな不安が入り交じっていると思います。これから始まる４年間を実りの多いものにするためにも、不安を解消し、一日も早く一橋大学に馴染んでほしい。こんな思いから、一橋大学では新入生を歓迎し、応援する「新入生歓迎期」（通称・新歓期）を設けています。

一橋大学の「新歓期」には、多彩な行事やイベントがたくさん開催されますが、企画も運営もすべて年度毎の「新入生歓迎委員会」が行います。どの年度も、新入生歓迎委員会のメンバーは全員、自発的に応募した新２年生です。今年は、前期自治会を中心として有志で集まった新２年生メンバーによって構成されています。一年前に同じ経験をしているから、新入生の気持ちがよくわかる。新入生に一橋大学に馴染んでもらうためのサポートができるのだと思います。

新しい仲間のために何かをしたい全員そんな気持ちで臨んでいます

新入生歓迎委員会は11月に結成され、４月の末まで活動します。新歓企画などやることが多いので、３月までは休み返上、ときには委員会室に泊り込んだりしました。でも、全然苦にはならなかったですね。僕自身、先輩が企画してくれた歓迎行事を楽しみ、感銘を受けたので、今度は先輩として役立ちたいという気持。メンバー全員、同じ気持だと思います。

新入生へのサポートは、入試２次試験のホットドリンクサービスから始まります。以下、2005年度の企画を紹介すると、４月１日は「女子学生の集い」。女子学生は全体の約30%なので、女性同士の交流を深めてもらうことが狙いです。次いで２日～３日は、教室を利用した「サークル紹介」、７日～８日はクラス単位での「クラス・オリエンテーション」とつづきます。クラス・オリエンテーションで世話役を務めるオリター（オリエンテーター）も、有志の先輩方です。新入生全員がいい情報や適切なアドバイスを得られるよう新入生歓迎委員会では各クラス11～12人、計約300人のオリエンテーターに対して、「ポイントはここ」「こんな点に気をつけて」などといったマニュアルを配布、あわせて事前の研修も実施しました。

例年90%を超える新入生が参加する歓迎合宿は、仲間をつくる最大のチャンス

４月９日の「Cross-Cultural Party」（留学生との交歓会）の次は、11日～12日に１泊２日で新入生歓迎クラス合宿を行います。今年の行き先はまだマル秘（２月上旬に決定）、現在旅行会社と宿泊プランについて交渉中です。文字通り同じ釜の飯を喰うわけですから、互いに打ち解けられるし、友だちをみつけるチャンス。この合宿には例年90%を超える新入生が参加しています。オリエンテーターも大勢参加するので、面白い裏話なども聞けるはず。大いに楽しんでほしいと思います。ただし、ここで大切なのは学生の一人ひとりが、一橋生らしい品位を保つということです。

日程は４月23日（延期時24日）ですが、新入生歓迎合宿の１～２週間後にスポーツ大会が開かれます。去年はクラスTシャツのファッションショーも開かれ、すごく盛り上がりました。今年はさらにエンターテインメント性をプラスする計画です。そして新歓期の締めくくりは、如水会（同窓会）による歓迎会が千代田区一ツ橋の「如水会館」で開かれます。スーツ着用のパーティーで、ちょっと大人になった気分を実感してください。

学生のことは、学生が主導でやる「リベラル」は一橋の伝統です

最後に、新入生歓迎委員会のもう一つの活動をご紹介しましょう。合格発表のときに配られた「Ａｂｏｕｔ　Ｈ」の編集・制作がそれです。一橋大学での生活・学問等を学生の目線で伝えた冊子ですから、すでに熟読した人も多いことでしょう。まだの人は、ぜひ目を通して、疑問や質問を僕らやオリエンテーターにどんどんぶつけてほしいと思います。僕たち新入生歓迎委員会の委員はブルーのウィンドブレーカーを着ていますから、気軽に声をかけてください。こうした多彩な情報提供や一連の行事が、100%学生の手で行われるのは、とても素晴らしいことだと思います。僕自身、学問はもちろんですが、「一橋祭」のレベルの高さに憧れて一橋大学に入学しました。一橋大学のリベラルな伝統は、いまもしっかり生きていますし、授業以外でもさまざまな嬉しい発見があるはず。いろんなことにチャレンジして、大学生活を満喫してください。そして、発見した何かや挑戦した成果を、来年はみなさん自身で次の新入生に伝えてほしいと思います。（談）

自治団体連合

全国的にも珍しい学生組織を統括する組織

自治団体連合事務局長
法学部２年

森　要平

自治団体連合は、体育会（総務）、文化団体連合など10の学生組織で構成されています。学生の実質的に約８割が、その傘下のクラブやサークルに所属していると推測されています。かつては、これらの各団体が自らの団体の運営費をそれぞれ独自に新入生から徴収してきました。それを一括徴収すると同時に、各団体の資金運営の監視・監査を行う組織として発足したのです。運営費って何？と思われる方もいらっしゃると思いますが、学内で学生による学生のために行われる活動のための運営資金だと思ってください。例えば学園祭の講演会などの企画の運営費や、学内新聞（一橋新聞）の発行にかかわる費用の一部などをこの運営費から捻出することになります。このように新入生にとっても徴収の意味がわかりやすいように説明したり、また徴収費が確実にそれぞれの加盟団体に還元されるようにマネジメントするのが、私たちの役割です。

学生自身が独自に組織をつくって活動資金を集めるというのは、全国的にも珍しいスタイルであり、学生の自治意識が強い一橋らしさだと思います。新入生には一橋大学の学生という、当事者意識を持って活動することを期待しています。（談）

文化団体連合

「グローバル」に活躍する文化系サークル

文化団体連合委員長
経済学部２年

山田祥隆

文化団体連合には、現在約50の文化系サークルが所属しています。その連絡調整が私たちの主な役割です。例えば、新入生歓迎パーティーなどのイベントへの予算配分や、それぞれの団体の活動内容をパンフレットにまとめ広報活動、募集支援などを行います。文化系団体とはつまり体育会以外という意味合いも多少あり、それらは音楽系、芸能系、研究会系と大きく３つの団体に大別されています。基本的には、好きなこと、感心のあることをじっくりやろうというのがコンセプトです。こうしたサークルの中には「Pro-K」や「すなふきん」のように授業の中から生まれ、その活動が認められ研究費がついたものや、ＡＩＳＥＣのように世界89カ国800大学以上に委員会を持つ世界最大の学生ＮＰＯで海外インターンシップを通じて国際理解を深める活動をしているものもあります。グローバルにそして足元のローカルを忘れずに、さまざまな活動を展開しているのが一橋大学の文化系サークルなのです。（談）

体育会総務

全学生の約3分の1が体育会に所属しています

体育会総務幹事長
商学部３年

奥山浩平

意外に思われるかも知れませんが、一橋大学はスポーツがとても盛んです。体育会に所属するクラブは38あり、全学生の３分の１が参加しているほど。スポーツと勉強の両方をがんばって、大学生活をより充実させようという「文武両道」の伝統は、いまもしっかり息づいています。各クラブはそれぞれ「勝つ」という目標に向かって厳しい練習を積み重ねていますから、仲間同士や先輩とのつながりも自然に強くなります。

38のクラブのなかには、一部リーグで優勝を争うクラブもあれば、プロになる先輩を輩出した競技ダンス部、カヌーで渓流を下るラフティング部などユニークなクラブもあります。ボート部や男子ラクロス、アメフトなど大学ならではのスポーツが強いことも、一橋大学らしい特徴といえそうです。

こうした体育会全体の運営やクラブ同士の連携を担うのが、「体育会総務」です。「すべてのクラブに公平に」をモットーにとりまとめや大学との連絡、コンパの企画、体育会の活躍ぶりを全学生にアピールする「一橋スポーツ」の制作など幅広い活動を行っています。勉強、僕自身が所属するラクロスの活動に体育会総務の仕事が加わり忙しい毎日ですが、逆に時間管理に強くなりました。（談）

新聞部

新聞部員からみた「一橋らしさ」とは？

一橋新聞部部長
社会学部２年

稲川琢哉

活動は学内報道がメイン。学生が知りたい情報をキチンと提供するのが使命です。学生の信頼を裏切らないように、情報の取りこぼしがないように気を使います。具体的にはカリキュラム編成や学費問題など。特に、『授業評価』のアンケートは毎回特集しています。どんな切り口で載せるか、苦労しています。

『一橋新聞』は、2004年６月15日に創刊80周年を迎える伝統的なクラブです。「大学内の活動を映す鏡」としての存在感を常に意識して編集、広報活動を行っています。

新聞部の立場から一橋らしさを検証してみますと、学生の自治意識が高く、学問、課外活動を問わずに非常に自由度が高い大学だということが言えます。学生にも自分たちのポテンシャルを高めるために大学を活用しようという意識がありますし、多くの学生にとって大学は自己実現の場ととらえられているようです。体育会系に関しては、大学ならではのスポーツ、例えばボート、アメフト、ラクロス、競技ダンスなどがかなり活躍しています。また、運動系、文化系を問わず、多くのサークルが伝統的に津田塾大学とインカレを行っていることも特徴と言えます。（談）

学生起業家

インターネット古書店で年商1500万円 学生が経営を学ぶ実践場に育てます

有限会社eco-college
代表取締役会長・アドバイザー
商学部4年

尾野寛明

やる気だけで立ち上げた専門書の古本屋

eco-collegeは、大学生だけで経営するインターネットの古書店です。専門書や大学の教科書に絞り込んだ商品構成で、昨年の売上は1500万円。全国の研究者や企業人にも人気です。儲かっているとまではいきませんが、事務所と1万冊の本を収納した倉庫の家賃、スタッフの給料その他を差し引いても黒字経営です。

2001年7月、手持ちの5万円で「会社」を始めたときの発想は、使用済の教科書を後輩に売ろうというもの。予備校時代の友人たちと某大学の前にクルマを持ち込んで買い取りをして、大学関係者に怒られたりもしました。仕組みづくりや経営を本気で考えるようになったのは、一橋大学在学中に学生ブックオフの社長になった有園さんの店で修業をしてから。30店舗を目標にがんばっている先輩の背中を見て、この人ぐらいのレベルになろうと心に決めました。その年の11月にネット上に店舗を立ち上げ、昨年の秋に有限会社として登記。現在、一橋・早稲田など11人の学生で運営しています。

eco-collegeは、会社というより学生が実践を学ぶ場として提供したい

こう紹介すると順調な歩みのようですが、ここまでくる過程は危機の連続でした。なかでも大きかったのは人の問題。意見の対立や意識の違いなどで運営そのものが危うくなったこともあります。正直なところ、「なんでこんなことやってるんだろう」と思ったことも何度もありました。でも、危機を乗りこえてきたプロセスそのものが、すごくいい勉強になったし、知識と実践が結びついて経営やビジネスを考える視点も深まってきました。eco-collegeは、金儲けだけが目的ではありません。大学生が経営を実践できる場をつくったこと自体に意味がある。後輩たちがビジネスを経験できる塾のような存在でありつづけたいと思っています。昨年秋、元気な1年生に社長を譲ったのもそのため。僕自身は会長兼アドバイザーの立場で、経営も仕分け・発送等の作業もサポートしながら、地域振興の実践ゼミや中学校のスポーツ振興など、自分の「やりたいこと」に挑戦しています。理論をキッチリ勉強することも大事ですが、やりたいこと・面白いと思うことに、どんどんぶつかっていくことも大事。それが大学生活をより豊かにしてくれると思います。（談）

The center of the academy

大学図書館の価値はどこにあるか。
保存する価値と利用する価値の狭間に立って——

『大学ランキング』という本があります。朝日新聞社が毎年１回、受験生向けに、様々な角度から大学の順位をつけているのです。この本の「大学図書館ランキング」で、一橋大学附属図書館はほぼ毎年、総合第１位の評価を得ています。総合の順位は、学生１人あたりの蔵書冊数、受入冊数、雑誌種数、貸出数、図書館費の５項目を指数化した数値の合計によって判定されているのですが、本学図書館はその５項目で偏りなく上位に名を連ねていて、そのことが総合の順位にも反映しているといっていいでしょう。しかし、それはそれとして、図書館の価値は、こうした数量をベースにした基準だけで判定できるものではありません。同じ数量の本でも、その価値はけっして等しいものではないからです。そこで、本学図書館はどんな価値をもった図書館なのか、単純には数値化しきれない価値にスポットを当ててみることにしましょう。

社会科学系外国雑誌センター

ほんの数名の専門家にしか必要とされなくても

本学図書館には<社会科学系外国雑誌センター>という、レア・ジャーナルを集中的に収蔵し、閲覧に供している組織が付設されています。

レア・ジャーナルとは、かんたんにいえば、ごく限られた専門家にしか必要とされないような雑誌です。そんな雑誌をすべての大学図書館が揃えることはできない。しかし、需要は皆無ではない。ならば、そういう外国雑誌を取り揃えている大学図書館が１つはなくてはならないということで、1985年に当時の文部省の指定を受け開設されたのが、本学図書館の外国雑誌センターです。ちなみに自然科学系の分野では、東京工業大学、大阪大学医学部、東京大学農学部などに外国雑誌センターが設けられています。

社会科学系の外国雑誌センターが、他ではなく本学図書館に設けられることになったのは、本学図書館がこれまでの百年をこえる歴史の中で、社会科学系の和洋図書を体系的、網羅的に収蔵してきたというベースがあってのことです。

本学図書館の蔵書は約170万冊にのぼり、その絶対数だけをとっても国内のすべての図書館の中でトップ10に入ります。しかし、蔵書の多寡だけで本学図書館の特色を

世界各国の雑誌が約１万5000タイトル揃う

あらわすことはできません。たとえば、本学図書館の170万冊には、他の多くの図書館では蔵書の大半を占めている文学書や理工学書の類がほとんど含まれていません。すなわち、文学書や理工学書以外の社会科学系の蔵書だけで170万冊近くに達しているのです。こういうところにこそ、本学図書館の大きな特色の一つがあるといっていいでしょう。同じことが、雑誌のタイトル数についてもいえるというわけです。

本学図書館が、本学の学生や教職員のみならず、学外の研究者からも重宝され、学外からの入館者が年々増え続けているのも、そのためだといっていいでしょう。

この外国雑誌センターで購入したレア・ジャーナルは現在、学内予算で購入した一般の逐次刊行物類に混配され、雑誌棟に一括収蔵されているため、これがそうだという識別はしづらくなっていますが、逆にそのことで、利用者にとっては特別な意識はもたずにレア・ジャーナルに接することができるようになっています。

なお、本学図書館の雑誌棟は、1996年に建てられた学生用学習図書館を、現本館が開館した2000年に用途転換した地上5階・地下1階の建物で、ここには現在、約1万5000タイトルの和洋雑誌を中心に、新聞、統計、白書、法令資料などが集中配置されています。

雑誌棟は地下1階から地上5階まで雑誌を中心に集中配置される

中央図書館制度

その一番の恩恵を受けるのは

本学図書館が社会科学系の図書や雑誌を体系的、網羅的に収蔵しているのは、さまざまな歴史的背景があってのことですが、その背景の一つとして、早くから<中央図書館制度>を採り入れてきたということが挙げられます。

中央図書館制度とは、図書や雑誌の収蔵場所を分散させず、中核となる図書館に集中配置するという仕組みで、近年では多くの大学で採用されるようになっていますが、本学はワン・カレッジからスタートしたという経緯もあって、ごく自然のなりゆきで、気がついた時には中央図書館制度をつくりあげていたのです。この中央図書館制度があったからこそ、本学図書館には、社会科学の総合大学としての教育・研究内容に見合った図書や雑誌が体系的、網羅的に収蔵されてきたということもできます。

これと対極にあるのが、学部に附属する資料センターや、場合によっては研究室ごとに必要な図書や雑誌を分散配置するという方式です。個々の教員にとって、必要なライブラリーはつねに身近におきたいものではあるのですが、しかし、そうした方式では、大学全体の資産であるはずの図書や雑誌が特定学科の教員と学生に専有され、他の教員や他学部の学生には利用しづらくなってしまうという弊害が生じます。学内での重複購入も増えることになります。また、既存の学問領域の狭間にあるような図書や雑誌が抜け

落ちてしまうということにもなりがちです。

一方、中央図書館制度には、教員も学生も図書館にまで出向かなければ必要な資料が利用できないという不便さがともないますが、本学では、図書館と研究室を近接させることで、そうした不便さを補ってきました。必要なときにいつでも図書館が利用できるように、開館日や開館時間も大幅に拡大してきました。さらに近年では、電子アーカイブシステムを構築することで、研究室単位でも必要なライブラリーは一通り取り揃えられるようにしています。本学の４つの学部（研究科）が独立した建物をもっていないのも、学部（研究科）間の垣根が低いのも、こうした中央図書館制度と無関係ではないでしょう。

この中央図書館制度の恩恵を受けているのは、まず第一に学生たちでしょう。大学図書館へのアクセスの自由度において、教員と学生の情報格差はかぎりなく小さくなっているからです。

開架式図書館

100万冊の図書と1万5000タイトルの雑誌が自由に閲覧できる

本学図書館では、蔵書の大半、具体的にいえば約100万冊の図書と約１万5000タイトルの雑誌を開架で配置し、入館者が直接手に取って閲覧できるようにしています。開架式の配置はほとんどの図書館で採用されていて、取り立てていうことではありませんが、これほどのボリュームの蔵書を開架で配置している大学図書館は他に例がなく、これも本学図書館の大きな特色の一つだといっていいでしょう。

開架式にすると、書架に並べられた図書や雑誌は、入館者が自由に出し入れするため、本来の配列に乱れが生じ、そこにあるはずの図書や雑誌が行方不明になってしまうというケースも出てきます。図書館を管理運営する上では負担の大きなサービスといえるでしょう。しかし、開架式の配置には、探している本の周辺に並んでいる本も同時に利用者の目に入り、そのことが研究や勉強に膨らみをもたせるという、閉架式の図書館ならではの得がたい効用もあるのです。本学図書館が、時計台棟、本館、雑誌棟のほとんどすべてのフロアを開架式の書架にしているのは、なによりもそうした効用を考えてのことです。

もちろん、膨大な図書や雑誌の中から、探している本を利用者自身が見つけ出すことはそう容易なことではありません。そこで、本学図書館では本館１階に情報検索コーナーを設けているほか、各フロアにも情報検索端末を設置し、探している本が本学図書館にあるのかないのか、あるとしたらどこにあるのかを素早く簡単に見つけられるようにしています。また、専門係員によるレファレンス・サービスとして、文献検索や事項調査、本学未所蔵資料の所在調査、利用指導なども行っています。

約100万冊の図書と１万5000タイトルの雑誌が開架で配置される

卒業論文の永久保存

大学の資産として活用するために

本学図書館の存在が、在校生のみならず、卒業生からも特別な思い入れをもって受けとめられているということは、この連載特集でも繰り返し述べてきましたが、これは、本学図書館に、本学で学んだ学生のほとんどすべての卒業論文が永久保存されているということもあってのことではないでしょうか。卒論をここまできちんと保存している大学図書館は、そう多くはありません。

学生にとって、卒論はいわば初めて執筆する本格的な研究論文であり、大学での勉強を集大成したものです。それだけに、大学時代の思い出が卒論にオーバーラップし、その卒論が本学では大学図書館にオーバーラップすることになるというわけです。

図書館には、ほとんどすべての卒業生の論文が収蔵されている

卒論の多くは単に保存されているというのではなく、ゼミの後輩たちの卒論執筆に直接的、間接的に役立てられています。ゼミ生の多くは、担当教官から、そのテーマで卒論を書くのなら、何年度卒の誰それの卒論を参考にしろというような指導を受けることになるからです。

卒論提出が制度化される以前には、＜修学旅行報告書＞という調査レポートが執筆されていて、これも本学図書館では大切に保存しています。この報告書は、成績優秀な学生若干名を選び、旅費を給付して地方商工業を視察させ、その成果を調査レポートとして提出させたもので、この中には、現在でも学内外の研究者に利用されている貴重な報告書がいくつも含まれています。

このように、本学では伝統的に、学生の研究を、教員の研究と同様、大学の資産の一つとして受け入れ、活用への道をひらいているのです。そしてそのことが、すべての卒論を附属図書館に永久保存するということにも反映しているというわけです。

日々のルーチンワーク

蔵書の価値をいかにして高めるか

本学図書館は、百年をこえる歴史の中で、メンガー文庫やギールケ文庫をはじめ、世界的な至宝とされる貴重な古典籍を数多く収蔵してきました。そうした古典籍は、書架に並べておくだけでもマテリアルとしての劣化が進むため、そのほとんどは現在、保存と修復の専門技術者を擁する古典資料センターに移管していますが、それ以外の書籍も、年月を経るにつれ、利用者が増すにつれ、そこかしこに傷みが出ています。

したがって、これをできるだけ食い止めるため、表紙を付け替えたり、破損部分を修繕したりという作業は、本学図書館の管理運営スタッフにとっては日々のルーチンワークの一つにもなっています。雑誌や新聞などの逐次刊行物

については、一定の号数が揃いしだい、合本して製本雑誌のフロアに移す。戦中・戦後期の低品質の紙を用いている図書や雑誌については、中性紙の箱に入れ、閲覧には注意を払うように呼びかける。損傷がひどい場合には、再製本をしたり、同じ内容の新刊本や復刻版などに差し替える。差し替えができない場合には、マイクロ化やデジタル化により画像データとして閲覧に供する——。こうした、長年にわたる作業を通して本学図書館が培ってきた技術ノウハウは、現在、他大学からも注目されるようになっています。

とはいえ、できるだけ損傷しないように保存することと、できるだけ利用しやすいように閲覧に供することとは原理的に相反することで、図書館の管理運営にはつねにそのジレンマがつきまといます。しかし、本学図書館では、基本スタンスとして、蔵書は利用されるためにあるという考え方をもっています。利用されなければ、どんなに優れた蔵書もその価値を発揮できないからです。稀覯本や希少雑誌も混配した100万冊規模の蔵書を開架で配置しているのも、そうした考え方に基づいてのことです。

あえていえば、本学図書館のいちばんの価値は、このような、蔵書の利用を可能なかぎり促進するという考え方にあるのかもしれません。

社会科学古典資料センター内にある
古典資料修繕のための工房

冷戦の終焉は平和社会の始まりではなかった

この20年ほどの間に、世界は二つの大きな変化を経験しました。一つは戦後の世界を支配してきた冷戦の終結であり、もう一つは経済のグローバル化です。

ソ連邦はやがて崩壊すると、多くの専門家は予想してはいましたが、何十年も先のことと見ていました。しかし現実には1989年、東欧で相次いで共産党体制が瓦解、11月には冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊し、12月にゴルバチョフ・ブッシュ両首脳は冷戦の終結を宣言、翌90年には東西ドイツが統一されました。この89年から90年にかけての一連の動きとそ

情報化、ボーダレス、新秩序
国際問題は、既に国家のわくを越え個人の問題である

の波及の速度を正確に予測しえた専門家は、誰もいなかったのです。冷戦の終結に世界が期待したのは平和でしたが、この願いが裏切られたことはご存じの通りです。むしろ逆に、旧ユーゴスラビアなどでの民族紛争、さらには中東での戦争と国際秩序は不安定の度合いを深め、今日のイラクでの事態に至っています。

90年以降のグローバル化が生み出した新しい富、そして経済格差

一方、90年代に加速されたグローバル化は、新たな富を生み出し、世界を豊かにしてくれるだろうと期待されていました。ここでも現実に起こったことは、期待とは裏腹。貧富の差はさらに拡大し、一握りの勝ち組対多数の負け組という構図を生み出しています。さらにグローバル化の原動力となったＩＴ技術の進化は、デジタル・デバイドという新たな格差を生み出すことにもなったのです。

これらの変化はあまりにも急速に進展しているため、研究対象としては現状を把握するのに精一杯というのが実情です。しかし、これからの世界をさらに変化させつづけることは確実。今後どうなっていくのだろうと、知識と知恵を巡らし、想像力を駆使して取り組んでいくことになります。ここに、国際関係を学ぶ醍醐味と面白さの一端があると私は思っています。

国家間の垣根が低くなり国家には、新しい役割が期待されている

グローバリゼーションの進行は、情報と経済、人の交流を急速に押し進めました。このことは、国際関係の構造をダイナミックに変化させるとともに、国家とはいったいどういう存在なのか、これからの国家はどうなるのかという大きな問題を生み出すことにもなったのです。いま世界は、巨額のマネーが一瞬で国境を越えて移動し、情報が瞬時に駆けめぐる時代を迎えています。ボーダレス化が現実のものとして進行し、国と国の垣根が低くなっている現在、国家はもう過去のものだという見方をとる人もいます。しかし、かつて主権国家がもっていた硬い殻が破れ、ゆるやかな紐帯へと変化していくのではないでしょうか。私は、国家は以前とは異なる役割が期待されていくのではないか、つまり国家という機能自体が変わっていくのではないかと考えています。

国家の主権者である国民の意識はいま、ますます多様化しています。右向け右の統制は通用しません。一方で経済と政治がせめぎ合い、他方で国民の価値観がバラバラな時代だからこそ、政府は国家のビジョンとそのためになすべきことの優先順位を明示し、国民に問題提起をする必要があると思います。そして、国民も、国家の課題を当事者として受け止め、どういう社会が自分たちにとって望ましいのかを考える必要があると思います。なぜならグローバリゼーションの潮流は、社会や国家だけではなく、個人をも巻き込んでいくからです。

変化こそチャンス それを力に変えられるのは自立した個人

冷戦の終結のように、予測を超えた「何か」が大きく時代を変えることは、今後も大いにあり得ることです。また、グローバル化の進展につれ、ビジネスはもちろん日常生活のなかで異なる価値観や文化とふれあう機会はますます多くなっていくことでしょう。人間は未知なるものに遭遇したとき、一瞬たじろいだり、拒否反応を起こしたりしがちです。しかし、実は変化こそチャンス。かつてのタコツボ型の集団社会が揺らぎつつあるいま、日本が向かうべきなのはキチンと確立された個人と個人が、ある種の連帯を結び合う成熟した社会です。自分の生き方を大事にする人は、人の生き方を尊重できるもの。自分で選択し、リスクをとって行動できる、豊かで成熟した社会を形成していくためには、世界とその構造を知り、国家・社会というものを知り、他者を知り、自分を知ることが不可欠。若い人びとにとって、国際関係を学ぶことが、その契機となることを期待しています。（談）

法学研究科教授
野林 健
Takeshi Nobayashi

1945年生まれ、1974年、一橋大学大学院博士課程単位修得。法学博士。
研究テーマは国際関係における政治と経済の関係、外交政策の決定プロセスなど。
近著に『国際政治経済学・入門』（共著、有斐閣、2003年）。
68年、学部時代に冷戦真っ只中・ベトナム戦争泥沼化のアメリカへ留学したことが、国際関係に興味をもったキッカケ。学生時代から趣味は多彩で、現在パワー系ではウエイト・トレーニング、癒し系ではショパン、リサーチ系では現代建築・都市文化・ポストモダンアートの探索・評論を楽しんでいる。
「4年後の定年退職を機に、建築・美術分野への転進を図る」とか。

洋食、洋服の社会浸透
女性の社会進出の素地は
戦時中につくられた

戦後の日本社会には、戦争や軍隊に対する強い忌避感が存在していました。このことは日本が軍事大国化する歯止めとなりましたが、同時に軍や戦争に対する研究をタブー視することにもなりました。政府や自衛隊関連の組織を除くと、つい近年までほとんど研究が行われてこなかったのが実情です。しかし、人類の歴史が示しているように、どの時代の戦争も社会や国のあり方に大きな影響を与え、技術や文化の進化と深く関わってきました。近代の日本もむろん例外ではありません。軍隊は洋食や洋服を日本の社会に浸透させ、近代化の推進の一翼を担ってきましたし、農家の二男・三男といった貧困層の人びとに社会的上昇の場を与えることにもなったのです。

第二次世界大戦下の日本軍をみても、そこに当時の日本社会のあり方を読み取ることができます。諸外国が軍の近代化を進めていくなかで、日本軍は装備や組織を近代化することができませんでした。組織は、軍の教育機関出身者を頂点とした極端な身分制で運営され、一般の兵士に開かれていたのは下士官になるというかぼそい道だけ、学徒動員兵は消耗品の臨時雇い扱いでした。家制度が厳然として存在していたため、日本には女性兵士は皆無でした。あらゆる人的資源を必要とする「総力戦」へと追い込まれていくなかで、実は当時の日本社会にはそのシステム自体ができていなかったということです。その一方で、「戦争に勝つ」ために、日本社会には新しい施策が次々と導入され、それが日本を変えることになりました。食糧増産政策は戦後の農地改革へとつながり、女性の勤労動員は女性の社会進出への下地をつくることになりました。為政者や軍隊の意図とはおそらく裏腹に、第二次世界大戦は日本社会を大きく変え、戦後の社会を準備していたということです。

事実を正しく理解することが
国際社会との共生につながる

終戦から60年を経た日本では、日々、戦争の記憶が遠のいています。多くの日本人にとって戦争は「他所事」になっているといっても、過言ではないでしょう。例えば、子どもたちの遊びにも、それが象徴されています。私が子どもの頃は、少年雑誌に戦艦大和やゼロ戦の記事が載っていましたが、いまは触れられることすらありません。男の子に人気だったリアルな兵士のキャラクター人形は、近未来の架空兵器に取って代わられています。

平和であることは素晴らしいことですが、それが戦争に対するリアルな想像力の欠如につながってしまうことは、決して良いことではありません。戦争体験のない人ほど、あるいは戦争に対するリアルな想像力をもたない人ほど、相手に対して不寛容になってしまう傾向があるのです。現実にいまなお世界では戦争の危機をはらんでいる国や地域は少なくありませんし、日本が自衛隊派遣というかたちで関わりをもっているイラクでも戦闘状態がつづいています。東アジアや諸国との関係でも、か

戦争という現実と向き合うことで
国、社会のあり方、そして自分自身の生き方を考える

社会学研究科教授
吉田　裕
Yutaka Yoshida

1954年生まれ。1977年、東京教育大学文学部卒業後、
一橋大学大学院社会学研究科修士課程入学。79年、博士課程進学。
83年、同課程単位取得退学。同年、社会学部助手に。96年、社会学部教授。2000年4月から現職。
専門は、日本近現代政治史、日本近現代軍事史。
戦争や軍に関心をもったキッカケの一つは、
最も戦死率が高い大正10年生まれの父との関係から。若い頃は反発した父だったが、
その世代を内在的に理解したいという気持が次第に大きくなったという。

つての戦争の記憶はいまなお色濃く残っており、外交政策等の上で不安定要素の一つとなっていることはご存じの通りです。戦争はイヤ、では問題は解決しません。戦争が起こったという事実や戦争の記憶を捨象したまま、諸外国との相互理解や共生は生まれないと思います。グローバル化がますます進んでいる時代だからこそ、私たちは戦争や軍隊が社会のなかで果たした役割を正しく理解し、それらがなおも存続している背景をキチンと捉える必要があるのです。

私自身も戦後世代ですし、いまの学生の両親もほぼ全員が戦争体験をもたない人たちです。戦争について考え、戦争に対するリアルな想像力を涵養するために、私のゼミでは兵士の体験記や日記、回想記などを活用しています。最前線の塹壕のなかで兵士はどんな体験をし、何を感じたのか、空爆のなかで市民は何を見たのか、そういった「現場」を疑似体験することが、一人の人間として戦争を考えるキッカケとなると思うからです。立場が違えば、当然、歴史観も違います。日本と韓国間で共同作業として歴史教科書の相互批判が始まったように、異なる歴史観に目を開いていくことは、学問の上だけでなく、共生を基盤とした国際関係を築いていく上でもとても重要です。だからこそ若い人たちは、さまざまな歴史観をつきあわせ、その過程を通して社会や国のあるべき姿や自分自身の生き方を考えていってほしいと思います。（談）

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。
彼女たちは、いかにキャリア構築し、どのような人生のビジョンを抱いているのか？
HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介しています。
第６回は、展覧会のプロデュースにたずさわられている柴田勢津子さんにご登場いただきました。
聞き手は、編集委員、社会学研究科の足羽與志子です。

プロとしての良心を貫くことで 美術ファンを増やすのが、プロデュースする側の使命

先の先まで見通せなくても、方向性は見きわめる 自分で道を開いて、次のステップへの準備をする

足羽　柴田さんは社会学部卒で現在は美術関係のお仕事と、異色のご経歴ですが、入学時から将来のプランを描かれていたのですか。

柴田　決まっていなかったからこそ、広く吸収できそうなところとして社会学部を選んだというのが正直なところです。大学に入ってからも、必要最小限の単位しかとらない不真面目な学生の典型でしたね。もともと美術は好きでしたが、関心があったのは、作品の評価が社会の中でどのようにつくられるのか、といった点で、美術史の中で学ぶイコノロジーや作家研究とも少し切り口が違っていた。展覧会のように作品が公開される「場」のあり方には興味がありましたが、それが仕事と結びつくとは、ほとんど考えていませんでした。それなら、モラトリアムは楽しく使うしかないか、と（笑）。河村錠一郎先生の前期ゼミでは、毎月なにか展覧会にでかけてレポートを書くという「楽しい課題」もありましたが、その他には、大学２年、３年の夏休みなどを利用して、２ヶ月間くらいヨーロッパ各地の美術館を訪ね歩いたりしていました。

足羽　フランスを中心に芸術社会学と呼べるような分野が開かれ始めたのはピエール・ブルデューが活躍し始めた80年代。柴田さんが学びたいことを学べる学術環境が日本にまだなかったし、仕事といえばなおさら。現在では一橋大学にも学芸員の資格を取れるプログラムが新設されましたが、日本でそうした仕事や資格がクリエーターとして社会的認知を獲得し始めたのはごく最近のことですね。

柴田　日本の学芸員の場合、海外のキュレーターとも違いますし、近年、資格としての認知度が高まった一方で、公立美術館の経営自体が揺れ動いている現在、学芸員のできること、すべきことも変化しているような気がします。私の場合は、美術への関心が仕事選びに直結していなかったこともあり、特に学芸員を目指すということもなく、卒業後はとりあえず、という感じで一般企業に就職しました。いわゆる「腰掛け」という感覚ではなかったのですが。でも、その分、企業を客観的に見られましたし、大きな組織のなかで働いた経験はプラスになっています。

足羽　会社は結局１年で退社されて、３年後の89年からルーヴル美術館学院に留学されるのですね。その間はどのような準備をなさっていたのですか？

柴田　美術史の講義などを聴講することもしましたが、フランス語の勉強には重点を置きましたね。その段階では、少なくともフランスで学びたいことは絞れてきていましたから、留学する前に、語学面のハードルはこえておきたいと考えました。

足羽　力をつけた分、穫ってこれるものも確かなものが多いから、まず力をつけてから留学するという考え方は、すごくいいですね。例えば、大学院に進学するという選択肢もあったと思うけれど、そうは考えなかったんですか。

柴田勢津子（しばた・せつこ）

1985年、一橋大学社会学部卒。同年、自動車メーカーに入社、国際事業本部に勤務。
86年、同社を退社。89年から91年までパリに留学、ルーヴル美術館学院とパリ社会科学高等研究所で学ぶ。
帰国後、「大和古寺の仏たち」（東京国立博物館）を皮切りに、
数々の展覧会の準備にたずさわった後、企画会社の社員として
「栄光のヴェネチアン・グラス展」、「東欧絵本の世界展」などをコーディネート。
2001年、I.D.F.Inc（イデッフ）を設立して、「チャペック兄弟とチェコ・アヴァンギャルド」展、
「フランス・コミック・アート展」などを企画・運営。現在は、
2005年秋から巡回する「シュヴァンクマイエル展」（神奈川県立近代美術館、他）を準備中。

足羽與志子
（あしわ・よしこ）
社会学研究科教授

柴田　大学院に籍があった方が、体裁が整ったとは思いますが、自分の方向性と一致しないのに時間と労力をかける必要もないのでは、と。もともと安全な人生設計を優先するタイプではないですし（笑）。フランスにいってからも、まずは吸収できるものを持ち帰るしかない、というところでしたが、ルーヴル美術館学院ではモノに触れる機会に恵まれ、パリ社会科学高等研究所では、レイモンド・ムーラン教授の芸術社会学のゼミが新鮮な刺激になりました。また、当時のフランスは、現代美術を振興させるための基金に行政が莫大な予算を投じていた時期で、各地にアートセンターができ、画廊を巻き込んで町が変わっていくさまを自分の目で見ることができたのは、幸運だったと思います。個人的には、フランス型の文化政策にはむしろ批判的ですが。

ゼロからの準備は、人との交渉が要
意思を明確に伝え、誠意を忘れずに

足羽　80年代後半のバブルの時代に日本では美術館が次々にでき、企業も文化支援に力を入れていました。いわゆる「箱モノ行政」も盛んだった。それがバブルの崩壊で一変した。柴田さんが帰国された92年は、まさにバブル崩壊の年でしょう。その影響は大きかったのではないですか。

柴田　多くの美術館の予算は税金で成り立っていることもあり、景気変動の影響は数年遅れでやってくるんです。ですから、帰国直後はまだ状況も悪くなく、企画展の契約スタッフのような働き口も、比較的、簡単にみつかりました。とはいえ、最初の仕事は、フランスとはかけ離れた、東京国立博物館の特別展「大和古寺の仏たち」。その後は、フリーの立場で展覧会図録の編集などに携わってから、私立の美術館を経営する企画会社でも働きました。独立して企画会社を設立したのは4年前ですが、バブルが崩壊し、以前のような潤沢な予算が取れなくなったことは、私にとっては逆にラッキーでした。というのも、予算が削減された分、泰西名画を中心にした大型展では埋まらない「すきま」ができた。基本的に、作品を動かして見せる仕事ですから、輸送費や保険料が莫大な額になる大モノを、大手メディアの主催で見せる意義はもちろんあると思いますが、身の丈にあった規模とコンセプトで勝負するしかないところが、かえって企画会社としての醍醐味でもありますね。

足羽　私たちはできあがった美術展しか目にする機会はないんですが、企画から開催までに至るには随分いろんな段階や準備が必要でしょう。柴田さんのお仕事の範囲は、具体的にはどこまでなんですか。

柴田　運営の仕方によっても違いますが、基本的には美術展という列車を走らせるレールを準備するところから、レールの撤収までのすべてです。コンセプトをまとめ、作品の所蔵先と交渉し、輸送や保険の手配をします。その傍ら、図録制作や広報も手がけます。もちろん、多くの関係者の協力あってのことですが、ひとつの美術展を終えるまでに4～5年くらいはかかりますね。また、仕事の大前提は、見せるためのモノを拝借することなので、集荷と返却の際には基本的に立ち会いますが、大事な作品をお借りして、事故なくお返しして当たり前。胃が痛くなることもしょっちゅう（笑）。

足羽　人対人の交渉がベースですと、組織の看板より個人の能力が問われますね。交渉力やプレゼンテーション力は当然でしょうが、ほかに何が重要なポイントだとお考えですか。

柴田　特に、交渉相手が海外の個人所蔵家になると、日本の大きな組織の看板でも通用しにくいのは事実です。度胸もいりますが、こちらの意思を明確に伝えることは大事ですね。また、開催まで長い道のりなので、条件が折り合えば終わりというものでもないので、結局は、その企画へ熱意や、相手への誠意といった基本の積み重ねかもしれ

カレル・チャペックによる『R.U.R（ロボット）』の初版本から第6版まで。
「出張先で貴重な資料を見つける勘は大事。」

『チェコスロバキア写真年鑑』のフルセット。
輸送費よりも、後に残る資料に比重をかけたいと考え
展覧会の準備の際には、様々な資料を収集。

ません。それと、現場に立ち会うことも多く、国内外の出張も頻繁にあるので、体力ももちろん要りますね（笑）。

行き先不透明な日本の美術館環境
ファンを育てるためには、プロとしての良心を

足羽　最近は東欧の美術、特にブックデザインの紹介に力を入れられているそうですね。どういうキッカケからなんですか。

柴田　約20年前、東欧圏のなかで最初に訪れたのがチェコでしたが、一橋時代の友人の先輩がプラハのカレル大学に留学中だったからなんです。そのとき、国立美術館に連れていってもらったのですが、収蔵品カタログさえなかったのに、なぜかヨゼフ・ラダという国民的な絵本作家の挿絵のポストカードだけが売られていた。一目見て惹かれて、名前も知らないままポストカードを買ったことが、チェコの絵本との最初の出会いになりました。これまでは日本で紹介される機会が少なかった地域なので、蓄積された情報がない難しさもありますが、営業的なスキマ狙いもある（笑）。実際、シート状の絵本原画や書籍は輸送面での負担が軽いというメリットもありますね。こうしたジャンルには派手さこそありませんが、美術館の垣根を低くすることによる集客効果もある。それに、日本で発行された資料がまだまだ少ないため、来館者の図録の購入率が非常に高いので、やりがいがありますね。

足羽　日本人と海外の人では当然、美術作品に対する感性もコンセプトも違いますね。展示する作品の選び方など「日本向け」は特に意識されるんですか。

柴田　美術館には、できるだけ多数の方の関心に添うようなものを提供する使命もあるわけですが、日本人に受けやすいものを意識しすぎてはいけないと思っています。また、日本人ならではの視点、というのも大切だとは思いますが、バイアスをかけすぎずにどう見せるかが、一番難しいところですね。同様に、プランニングする側の思い入れも大事ですが、思い入れだけではダメ。かといって思い入れが希薄ですと、見る人にメッセージが伝わらない。いろんな意味でバランス感覚が問われますね。

足羽　バランス感覚は、総合的な判断力や多極的なモノの見方、加えて声にならない細部への目配りがあってこそ成り立つでしょう。柴田さんはそのバランス感覚をどこで身につけられましたか。

柴田　不勉強の言い訳のようですが、大学時代から専門性に偏りすぎなかったことが、かえってプラスになっている面もありますね。それと、今は各方面で活躍している、学部を超えた友人たちとの交流は、視野を広げてくれたと感謝しています。私自身が、大企業志向もなく、キャリア志向でもなかったことで、見えた部分もあると思います。

足羽　無駄な知識や経験というものはない、むしろそれらが人間性やバランス感覚を培うのにもっとも大切、というのは全く同感です。今後お仕事をなさる上で、特に大切にしていきたいと思われるのはどんなことですか。

柴田　日本の美術展を取り巻く環境は決して成熟しているとはいえない。僭越な言い方ですが、日本はまだ美術ファンを育てなければならないのが現状。展覧会が批評の生まれる場になれば、という理想はまだまだ遠い感じです。先ほども、行き先不透明な公立美術館の状況を話題にしましたが、その中で、名前やキャッチだけが先行する人寄せイベントに走りがちです。牛乳や鶏肉、クルマは消費者がたとえ商品やメーカーに不信を抱いても、それらなしですませることにはつながりにくいですが、美術展だとそのうちそっぽを向かれてしまう危険性もあります。事業である以上、収益に目を配るのは当然ですが、労を惜しまずに作品を集めて丁寧に見せるというプロとしての良心は貫きたいですね。

足羽　「プロとしての良心」、どんな仕事にも通じる良い言葉ですね。本日はどうもありがとうございました。

対談を終えて

新宿の一角のアパートの10階においた柴田さんの事務所での対談。パソコンの本体部品を埋め込んだ透明の机、壁に所狭しと立てかけた作品群と書籍の山、そしてその間をエスプレッソの香りが漂う事務所は作品や物への冷静な愛着と企画展示の実践的戦略が生まれるコックピット。そこから眺める東京の高い空は彼女の感性がつなぐ世界へと広がっていくようでした。一橋の女性のしなやかさは、組織にいてもいなくてもまずもって独りで立つことを自明の理とし、気負わず弛まず進むところにあると、改めて実感しました。ロボットの発案者でもあるカレル・チャペックの作品に日本で会える機会を作ってくれた柴田さんに感謝。日本の芸術意識へのいっそうの刺激を！　（足羽與志子）

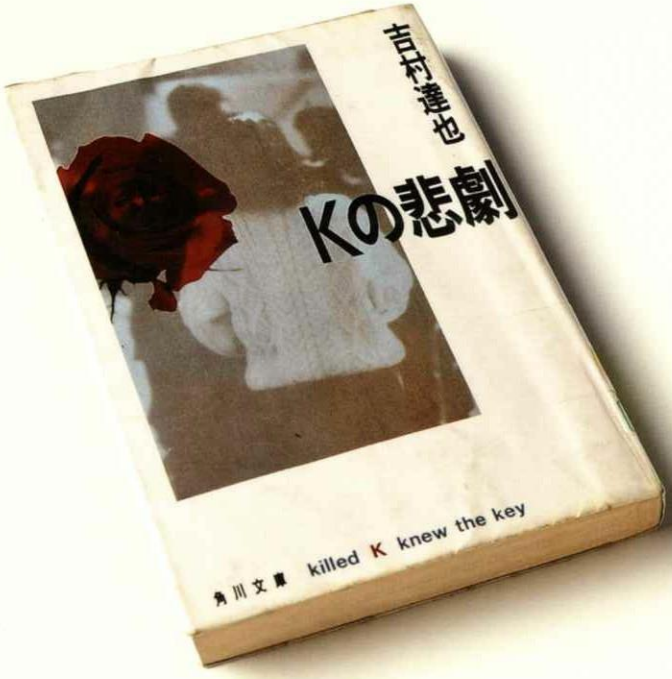
個性は主張する

One and Only One

第7話

作家

吉村達也氏



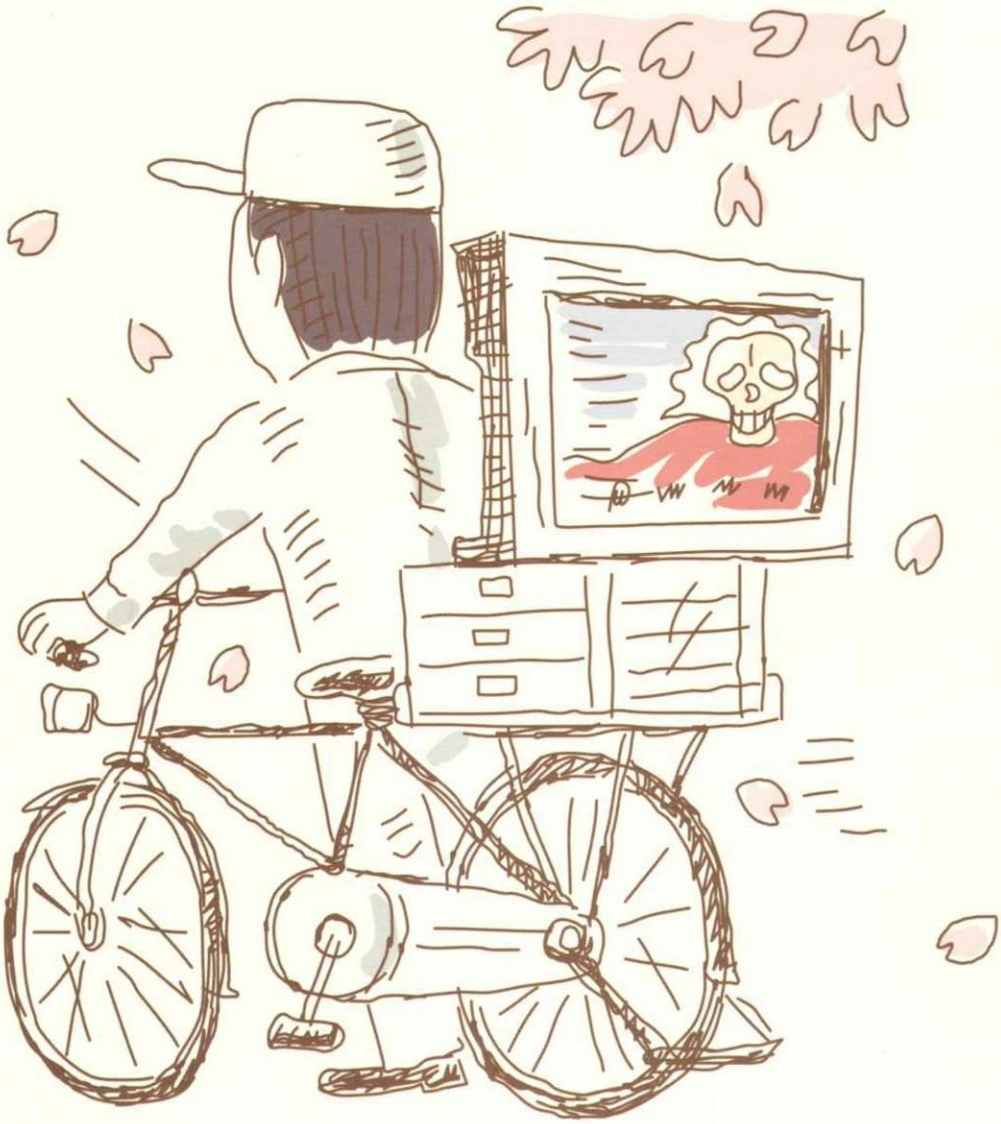
Tatsuya Yoshimura

人を喜ばせる、「紙芝居屋のオジサン」でありたい

怒りのエネルギーで1日20時間の猛勉強 執筆スタイルの原型もこのときに生まれた

2年前の秋、たまたま国立方面で取材があり、帰りに一橋大学に立ち寄ってみました。約30年ぶりのキャンパスは、私らの頃とそう変わってはいなかった。秋の日差しを一杯に浴びてランニングする学生を見ながら、私は懐かしさと同時にある種の寂しさを感じました。私にとって一橋大学は人生の航路に推進力を与えてくれた母校であると同時に、父との長い葛藤の歴史を象徴するものでもあったのです。父は東大出のバリバリのエリートで、「わが子はこう歩むべし」と一切、妥協しない男でした。母も然り。私は、小さい頃から親という権力の壁にぶつかっては跳ね返されてきた。一歩間違えば犯罪に走りかねない鬱屈を抱いてきました。だから、追い込まれた人の気持は痛いほどわかる。「一番怖いのは人間」という思いが、いま作家としてのコンセプトの一つになっているし、反面教師として家族の絆の大切さが作品のテーマになっています。

現実の私は、少年犯罪にも非行にも走らず、一応まともな高校生でした。その頃には反抗する虚しさが身に沁みていたので、大学受験も



「東大か一橋」という父の言葉に表面上は素直に従った。内心では「アホらしいから浪人はするもんか。早く卒業して親の影響力から抜け出そう」と、高３の11月から猛然と受験勉強しました。それまでの私は映画好きで、文化祭では芝居の脚本を書いたりと、成績はクラスで８～10番のレベル。合格の報告をしたら、担任の先生に「吉村くんだけは落ちると思ってた」と言われましたよ。

怒りがエネルギーになっていたからでしょうね、私の猛勉スタイルは１日20時間勉強するというメチャメチャなもの。高３も冬になると学校へ行かなくてもよかったので、20時間ぶっ続けに勉強して６時間寝る。起きたらまた20時間勉強というサイクルでした。現在の執筆サイクルもほぼ同じ、対象に向かってガーッと突き進むときのプロトタイプはこのときにできたのだと思います。

学習拒否で、ラリーに熱中。不勉強な学生をおおらかに包んでくれた一橋大学

大学時代は自動車部に所属、授業もゼミもさぼり放題でクルマに熱中していました。商学部だったのに、卒論は「三島由紀夫における演技のメカニズム」。一橋大学には、そんな度量の広さがある。私をおおらかに見守ってくれた河村先生には心から感謝しています。

当時の自動車部は、通称「ラリー部」。早稲田大学や上智大学の学生と競い合って、山岳地帯の悪路をひた走るクラブでした。木に衝突しそうになったこともあれば、崖に宙づりになったこともある。それでも止めようと思わなかったのは、「これがやりたい」という目的を発見できないまま、内側に溜め込んだエネルギーを何かにぶつけて解放したかったからかもしれません。

自動車部では大学対抗のときなど、賞品集めに企業回りをするのが慣例でした。普通はクルマ関連の企業を回るんですが、私が訪ねたのはＣＢＳソニー。ファンだった南沙織のポスターがほしいという、単純な動機でした。そこで初めて接したマスコミの世界は、私にとって衝撃でした。社会人といえば地味なスーツにキチンとネクタイというイメージだったのに、まるで違う。セーターにジーンズ、髭をたくわえたディレクターの姿に、惚れ込んでしまいました。就職試験を受けたら、なぜか制作部門にトップ合格。会社も期待してくれましたし、私もようやく「やりたいこと」が見つかったという気持でしたね。別に音楽マニアというわけではありません。私は、人を楽しませることと、新しい何かをつくりだすことが好き。人を喜ばせる仕事に就けるということが、魅力だったんです。でも、不勉強のツケで単位を落とし留年の憂き目に。ＣＢＳソニーは内定取り消しだろうと覚悟したのですが、会社の温情で大学５年生兼正社員と異例の処遇になりました。

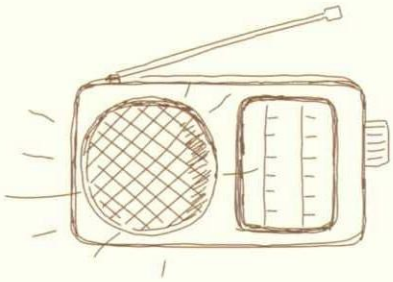
偶然の積み重なりが開いてくれた思いがけない進路

ＣＢＳソニーに勤務したのは、結局74年の５月までででした。ある事情で、辞める決心をしたんです。決断が間違っていたとは思わないけど、再び目的を失ってしまいました。どうせやりたいことがないんなら、給料がよくて休みが多い会社にしようと、見つけたのが某百貨店。いま思うと、一橋ブランドがあれば再就職もどうにかなるだろう、と世間をなめていましたね。一次試験は手応え充分だったので、もう受かった気になっていました。

そんなある日、音楽業界へ行きたいと留年した友人から「話が聞きたい」と電話が掛かってきました。その日デートの約束があったけれど、なぜかそちらをキャンセルし、男の友人のところへ行くほうを選んだのです。そして彼の寮の部屋で話しているとき、「吉村、ここ受

ける気ないか」と見せられたのがニッポン放送の願書でした。でも、応募締切りまであと2日、その上、一次試験と某百貨店の二次試験が同日でした。そう言って断ることもできたのに、私は受け取ってしまいました。折角友人が言ってくれたんだからと儀礼的な意味だけでは、願書を出してしまったことへの説明はつきません。自分でもわからない何かが私にそんな行動を取らせ、400倍の競争を勝ち抜かせたんでしょうね。ちなみに百貨店の方は、留年生は不採用とか。一次で不合格でした。

生身の人びとと生放送、ラジオ局の日々



1975年にニッポン放送に入社し、制作部ディレクターとして「タモリのオールナイトニッポン」「松山千春のオールナイトニッポン」などを担当しました。ラジオの制作現場は、本番になると無音の世界になる。その緊張感からか、どんなベテランの歌手やタレントでも、フシギにあがるんです。「なんでみんなタレントなのにあがるんですかね」とプロデューサーにたずねたら、「そういうものだから、試しにしゃべってみろ」と、いきなりスタジオに入れられた。でも、こっちは遊び半分ですから、あがるわけがない。意外にうまくいって……そうしたらなんと「オマエやってみろ」。半年間、パーソナリティを務めました。怖いもの知らずなのに、抜けている。突っ走るから暴走しちゃう。ディレクター時代の「6回連続で始末書を書いた」記録は、いまでも破られていないでしょうね。もっともそのあと、アタマを下げることを勉強しろ、と広報セクションに行かされましたが。

5年ほど編成部で企画プロデューサーを務め、31歳で再び現場に戻った頃から、本の世界へ行きたいという思いが強くなりました。もともと本は大好き、79年と80年に『オール讀物推理小説新人賞』の最終候補に残ったこともあって、いつか作家になりたいとは思っていました。たまたま同系列のリビングマガジン社が書籍部門に進出するという話を聞き、志願して出向しましたが一年半後に倒産。同じフジサンケイグループの扶桑社として再出発しました。編集経験はゼロでしたが、ラジオの生放送をやってきたから、流行への嗅覚も「面白いもの」をつくる自信もあった。書籍部門の編集長兼担当編集者として全盛期のおニャン子クラブの本など、タレント本でヒットを連発したのはこの頃です。

本づくりで楽しませるコツを実践できたこともそうですが、ラジオ局時代の8年間も作家としての私の原点の一つだと思いますね。生放送で多くの人とふれあい、この人がこういうことを言うんだと人間を知る機会に恵まれたし、テレフォン相談では人が求めているのは、忠告ではなく、自分の考えへの賛同なんだと痛感した。作品のなかであえて詳細な情景描写をしないのも、人間の想像力を大切にしたいという思いがあるからなんでしょうね。

将来が見通せる人生はつまらない 自分の運命は、自分自身で切り開く

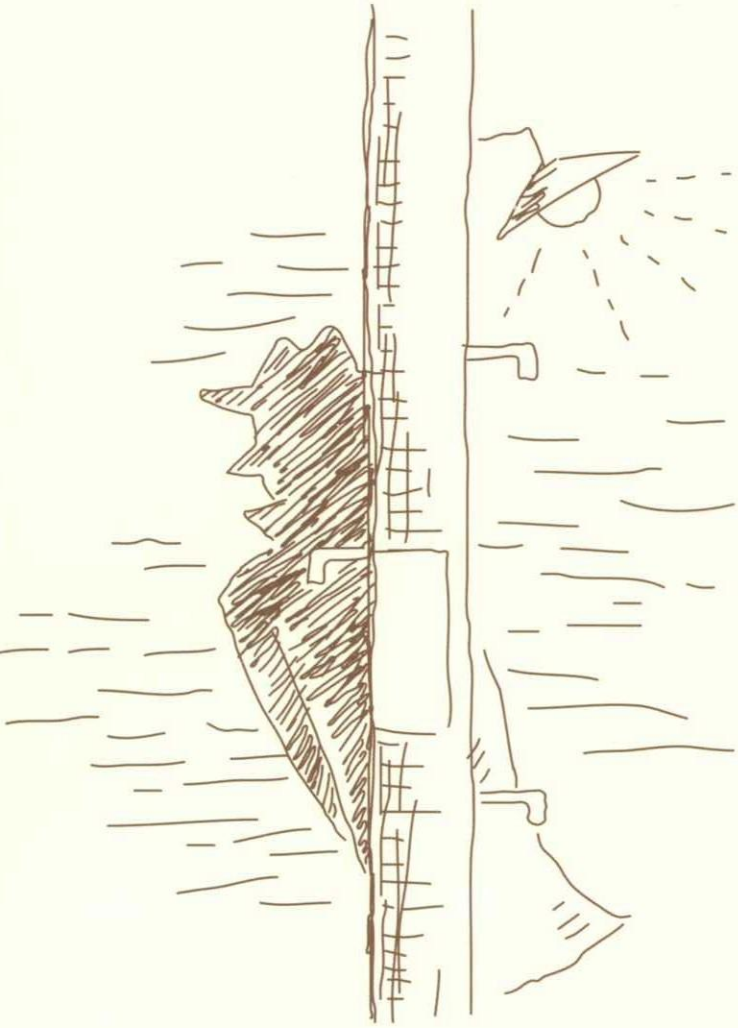
サラリーマン生活も15年目を迎えた、89年の春でした。天気予報で台風の今後の進路を、同心円であらわしますよね。あれと同じように、何年後はこのポジション、先行き出世したとしてもこの程度、左遷されてもこの程度だろうと人生の進路が見えてしまったんです。そうなると、俄然、つまらなくなった。よく紅白初出場の歌手が「去年はコタツで見ていました」とコメントしているでしょう。そんなような、予想もつかない展開を自分にも起こしたくなったんです。その根底にあったのは、自分の人生を自分で決めてこなかったという、強烈な思い。進学は父の意思、就職も友だちから分けてもらったようなものでしたから。

ここらで自分の意思で運命を切り開こうと、まず考えたのが起業でした。コンセプトとシナリオづくりは得意ですから、企画会社を3社起こし、それぞれ異なる業界で成功した人3人を集めようというプランを立てました。辞表を出し、辞めるばかりになった9月、あれこれシミュレーションをしていたとき「ちょっと待てよ」と思ったんです。私にあるのはサラリーマンの経験だけ、それで経営ができるのか、と。自分に真剣に問いかけても、イエスという答はでてこなかった。なら、しばらくじっとしていよう。何にもない状態から考え直そうと、当初の予定通りに退社してしまいました。とはいえ、家族を養わなければなりませんから、月30万円のギャラでFM埼玉とディレクター契約。年収が三分の一になりましたが、後悔はなかったですね。

作家としてのデビュー作は、86年の『Kの悲劇』です。それも、出版社は勤務先の扶桑社で、編集担当も編集長も自分という世にも稀なメジャーデビューでした。でも、この当時は専業作家になろうとはまったく考えていませんでした。プロになると決心したのは、1990年の第10回横溝正史賞に応募した『ゴーストライター』が最終候補作になり、その受賞パーティに招かれたとき。私の作品に対して「すぐにでもプロになれる」「運命の女神を掴みかけているんだから、必死で掴め」と、夏樹静子先生と森村誠一先生が励ましてくれたんです。で、その場で決意を固めた。いま掴まなければ、次のチャンスはない。たとえ失敗したとしても、またやり直せばいいという気持ちでした。

殺人やホラーなのに読む人が癒される
犯人＝悪者とは限らない
人を癒せる作家でありたい

専業作家になってから７年目に100冊、15年目の現在で170冊ほど書いてきました。作家になりたての頃は、人が言うのを聞いても信用しなかったんですが、実際に神がおりてくる瞬間がある。登場人物がひとりでに動きだすので、書いているうちに犯人が変わってしまうこ



ともよくありますね。時間は決して平均的に流れるものではない。ノッているときは、時間の経過がきわめて遅くなるから、結果として早書きになるだけです。一方で、200枚書いた作品を全ボツにすることもある。煮詰まったときは、執筆の神が止めている。止める理由があるのだと思います。

私の読者は、謎解きを楽しむ人ばかりではありません。殺人事件やホラーを題材にしているのに、癒されるという感想を送ってくれる人がずいぶん多いですね。それは多分、私が犯人を必ずしも悪者にしないから。逆に、殺される被害者には殺されるだけの理由がある、というのが私のスタンスなんです。私がめざしているのは、人を喜ばせる紙芝居屋のオジサンかもしれない。このインタビューもそうですが、私が顔を出さないのは読者それぞれの自由なイマジネーションを大切にしたいからなんです。

主人公の目で写真を撮り、分単位でメモを取る
徹底した現場主義を貫きつづける

私は現場主義ですから、小説の舞台になるところならどこへでも出かけて行くし、東京での取材であってもホテルに泊まり込んで、あちこち動き回ります。登場人物の目線で、その場所の夜の顔も朝の顔も見るためです。そして、目線の移動に沿って写真を撮り、分単位でメモを取ります。地方取材のときも、やむをえないとき以外、タクシーは使わず自分で運転します。地元の人には面白くも何ともない一本の木にインスピレーションを掻き立てられることがある。そんなところで停めてとは言いにくいし、ここは殺人現場にいいな、そのとき犯人はどんな気持でどう動くのか、なんて考えていますから、他人がいない方が気が楽なんです。

私も50歳を超え、もう悔やむ時間はないという気持が強くなってきました。絶対に後悔しないようにするには、自分でいい方向へともっていけばいいんです。私自身、曲がりくねった道を歩いてきたし、精神的な土壇場や八方塞がりも経験しました。そうした経験が、今日の私をつくってくれた。最悪は最善の伏線である、と、私は本気で思っています。

◆吉村達也（よしむら・たつや）

1952年生まれ、東京都出身。1970年、一橋大学商学部入学。４年次の秋からＣＢＳソニーで制作ディレクターとして働く。75年卒。同年、ニッポン放送に入社、「タモリのオールナイトニッポン」「松山千春のオールナイトニッポン」などを担当、自らも半年間、同番組のパーソナリティを務める。その後、編成部プロデューサーに。83年、系列の出版社・扶桑社に出向。書籍部門の編集長としてタレント本を中心にヒットを連発。86年、『Ｋの悲劇』で作家デビュー、その傍ら扶桑社ミステリー（文庫）の初代編集長に。マイケル・ジャクソンの母、キャサリーン・ジャクソンの伝記執筆プロジェクトで編集プロデューサーを務めたあと、89年末退社。90年、『ゴーストライター』が第10回・横溝正史賞で最終候補作となったのを機に専業作家に。ミステリー・ホラーなど多彩なジャンルで活躍中。

一橋大学生が受けることのできる奨学金一覧

以下は、一橋大学生が受けることのできる

●大学院生を対象とした奨学金（一部外国人留学生も対象）

奨学金名	対象者	給与・貸与の別
アイザワ記念育英財団	大学院に在学する者	給与
旭硝子奨学会	商・経の博士１年次	給与
安達峰一郎記念奨学基金	国際法専攻の大学院生	給与
池田育英会トラスト奨学会	愛媛県内高校卒業の大学院生	給与
岩国育英財団	社会学専攻の修士１年で30歳以下	給与
交通遺児育英会	大学院に在学する29歳までの交通遺児	貸与
信濃育英会	ボランティア活動に対する奨学金	給与
大学婦人協会	１年以上在籍した大学院女子学生	給与
日本証券奨学財団	修士課程１年次、博士課程１年次	給与
廣瀬育英会	富山県内高校卒業の大学院１年生	貸与
フジクラ育英会	修士課程に在学する者	貸与
富士ゼロックス小林節太郎記念基金	人文社会学を研究する博士課程在籍者	給与
松尾金藏記念奨学基金	社会学研究科修士１年次・博士１年次	給与
三菱信託山室記念奨学財団	修士、博士課程在学の30歳以下の男子	給与
守谷育英会	大学院に在学する者	給与
山口育英奨学会	大学院に在学する者	貸与
山田奨学会	大学院に在学する者	給与

●地方出身の学部生を対象とした奨学金（日本人学生のみ）

奨学金名	対象者	給与・貸与の別
福岡県奨学会奨学生	各地域の出身者であり、保護者が現在も居住していること。	貸与
石川県奨学生		貸与
岡山県育英会奨学生		貸与
茨城県奨学資金奨学生		貸与
富山県奨学生		貸与
宮崎県奨学会奨学生		貸与
岐阜県選奨生		貸与
長崎県育英会大学奨学生		貸与
山口県ひとづくり奨学生		貸与
福島県奨学生		貸与
川崎市大学奨学生		貸与
八戸市教育委員会奨学生		貸与
豊田市教育委員会奨学生		貸与

●学部生を対象とした民間奨学団体の奨学金（日本人学生のみ）

奨学金名	対象者	給与・貸与の別
アイザワ記念育英財団	大学に在学する学生	給与
青井奨学会	商・経・法の学部1・2年生	給与
あしなが育英会	保護者が病気災害等で死亡・障害の場合	貸与
安藤記念奨学財団	学部１年生	給与
池田育英会トラスト奨学会	愛媛県内高校卒業の学部２年生以上	給与
伊勢丹奨学会	商・経済学部の１年生	給与
磯野育英奨学会	学部１年生	給与
井上育英会	学部２年生	貸与
井深大記念奨学基金	学部１年生	給与
小原白梅育英基金	学部１年生で21歳以下	給与
樫山奨学財団	学部１年生	給与
川村育英会	学部２年生	給与
川本奨学財団	学部に在学する者	給与
北澤育英会	学部１・２年生	給与
木村奨学会	福岡県出身の学部１年生	給与
交通遺児育英会	大学に在学する29歳までの交通遺児	貸与
鴻池奨学財団	学部２・３・４年生	給与
国土育英会	学部３年生	給与
小林育英会	学部１年生	給与
小森記念財団	学部１年生	給与
埼玉学生誘掖会	大学に在学する主として埼玉県出身者	給与
信濃育英会	ボランティア活動に対する奨学金	給与
春秋育英会	学部１年生	給与・貸与
昭和奨学会	学部３年生で22歳以下	貸与
関育英奨学会	学部２年生	貸与
竹中育英会	学部２年生	給与
土屋育英会	学部１年生	給与
電通育英会	学部生（再入学・学士入学除く）	貸与
東京海上各務記念財団	学部２年生	給与
東ソー奨学会	学部３・４年生	貸与
中部奨学会	学部３年生	貸与
中村積善会	学部に在学する者	貸与
中山報恩会	学部１・２・３年生	給与・貸与
日新製糖奨学育英基金	学部３・４年生	給与
日本通運育英会	学部１・２年生	貸与

※表記以外にも独立行政法人日本学生支援機構による貸与型の奨学金があります。詳しくは学生支援課までお問い合わせください。

奨学金一覧です。詳細については、日本人向けのものは学生支援課、留学生向けのものは留学生課窓口までそれぞれおたずねください。

奨学金名	対象者	給与・貸与の別
日本証券奨学財団	学部２年生で22歳以下	給与
野間文化財団	学部生	貸与
平山教育財団	学部１年生	給与
廣瀬育英会	富山県内高校卒業の学部１年生	貸与
フジクラ育英会	学部に在学する者	貸与
古屋亨記念奨学基金	法学部１年生	給与
丸和育英会	学部２年生	給与
みずほ育英会	商・経・法の学部２・３・４年生	貸与
三谷育英会	石川、富山、福井県出身の学部生	給与
三菱信託山室記念奨学財団	学部２年生で22歳以下	給与
三宅シツ奨学金	広島県出身の女子学生	貸与
村尾育英会	兵庫県出身の学部1・2年生	給与
茂木本家教育基金	学部１年生	給与
森下育英会	大阪府出身の学部１年生	給与
森下仁丹奨学会	商・法・社会学部の1年生	給与
守谷育英会	大学に在学する者	給与
山岡育英会	学部１年生	給与
山口育英奨学会	学部生	貸与
山田奨学会	学部に在学する者	給与
ユーエフジェイ奨学会	経済・法の学部３年生	給与

●外国人留学生を対象にした奨学金提供団体

留学生に対する奨学金（研究助成金を含む）は給与型ですが、日本人学生を対象としたものとは違い、選考基準、対象者などがそれぞれに異なりますので、ここではこれまでに実績のあった団体名のみを記載しています（順不同）。
詳細については、独立行政法人日本学生支援機構が作成・配付している「日本留学奨学金パンフレット2004」（日・英）（ホームページ：http://www.jasso.go.jp/study_j/scholarships_sfisij.html）と財団法人アジア学生文化協会が発行している「外国人留学生のための奨学金案内」（ホームページ：http://www.jpss.jp）があります。
これらの冊子は留学生相談室にありますので、参考にしてください。

同窓会組織社団法人如水会（本学独自の奨学金）	
独立行政法人日本学生支援機構（学習奨励費）	
財団法人渥美国際交流奨学財団	財団法人タカセ国際奨学財団
財団法人ロータリー米山奨学会	財団法人交流協会
財団法人平和中島財団	財団法人とうきゅう外来留学生奨学財団
財団法人本庄国際奨学財団	財団法人伊藤国際教育交流財団
財団法人高久国際奨学財団	山田奨学会
財団法人みずほ国際交流奨学財団	財団法人エプソン国際奨学財団
財団法人アジア国際交流奨学財団	財団法人野村国際文化財団
財団法人共立国際交流奨学財団（共立メンテナンス奨学基金奨学金）	日本たばこ産業株式会社
株式会社三省堂書店	財団法人アジア教育文化交流協会
財団法人ユアサ国際教育学術交流財団	財団法人サトー国際奨学財団
財団法人東燃国際奨学財団	財団法人都築国際育英財団
財団法人辻アジア国際奨学財団	財団法人小林国際奨学財団
財団法人東京海上各務記念財団	財団法人霞山会
財団法人神林留学生奨学会	財団法人俊道国際奨学会
財団法人佐川留学生奨学会	財団法人旭硝子奨学会
財団法人国際文化教育交流財団	財団法人長谷川留学生奨学財団
公益信託「川嶋章司記念スカラーシップ基金」	財団法人朝鮮奨学会
株式会社東京三菱銀行	財団法人朴龍九育英会
財団法人国際日本文化研究交流財団	（冠）ドコモ留学生奨学金
（冠）藤光樹脂留学生奨学会	財団法人日商岩井国際交流財団
（冠）KANSAI PAINT SCHOLARSHIP	財団法人小原白梅育英基金
財団法人守谷育英会	財団法人青峰奨学財団
公益信託石森記念北米友好奨学基金	財団法人鹿島育英会
財団法人金子国際文化交流財団	財団法人アジア留学生奨学財団
財団法人中村積善会	財団法人橋谷奨学会
財団法人ヒロセ国際奨学財団	財団法人三井住友銀行国際協力財団
AIPPI・中松潤之助スカラーシップ	アーバンシステム管理株式会社
財団法人国際コミュニケーション基金	富士ゼロックス小林節太郎記念基金
Rural Asia Solidarity Association	イースタン・ブディスト・ソサエティー
財団法人安藤記念奨学財団	財団法人岡本国際奨学交流財団
日本生命財団	東京ライオンズクラブ50周年記念留学生奨学金
財団法人岩国育英財団	財団法人アジア学生文化協会
株式会社　大富	

国際企業戦略研究科
経営・金融専攻　国際経営戦略コースの学生のみ対象

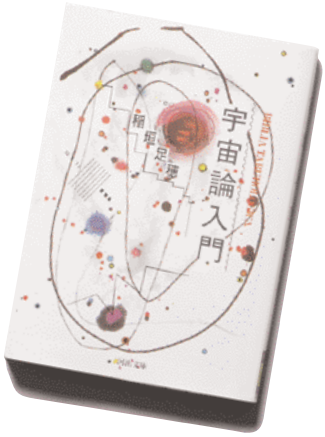
大和証券グループ	日本アムウェイ
オリックス	富士通
アドコム	

Book Review

大上慎吾　国際企業戦略研究科助教授

少年少女時代に憧れた天文学者、数学者への「夢の香り」を懐かしむ一冊

「二十世紀最大の数学者とも云われているヒルベルトは、
ある時、人から『彼はどうして数学者にならずに、詩人になってしまったのでしょう』と
訊ねられて、『たぶん数学者になるには想像力が欠けていたのでしょう』と答えたと云います。」
「日蝕観測隊員を載せて一路南へ南へと走っている軍艦『春日』の中で、
みんなの談話にも玉突きにも加わることなく、只一人、甲板上を行ったり来たりしながら
時々ポケットから対数表を出して調べている外国学者など、貴女は素敵だと思いませんか。」
（『僕の“ユリーカ”』より）



『宇宙論入門』稲垣足穂／著
河出文庫刊　定価：588円税込み
1986年1月4日（初版）発行
1991年6月26日（三版）発行

くすぐったい文章表現が現代美術のような印象を醸し出す

稲垣足穂の語る宇宙論の入門書には、このような「恥ずかしい」文章が随所にちりばめられています。もちろんアインシュタインやド・ジッター、ハッブル、ヒューメーソンといったお歴々の話や数学の話を平易に紹介するのが主旨なのですが、その間を埋めるこうした文章がこの作品を素敵な文学作品にしています。私は何でもビジュアルな（そして人には分かりにくい）イメージにするのが好きなのですが、重く鉄色に光る機械の隙間という隙間がきれいなピンク色の緩衝材で埋めつくされた現代美術の作品のような印象を受けます。

河出文庫版『宇宙論入門』には全体の約半分を占める『僕の“ユリーカ”』をはじめとする12の作品が含まれています。全体を通して共通のテーマが貫かれているというよりも、文庫の形にするために「星」に関する作品を寄せ集めたというところでしょう。冒頭の『螺旋境にて』などは足穂の初期代表作である『一千一秒物語』に通じる童話風の佳作です。稲垣足穂というと第一回日本文学大賞を受賞した『少年愛の美学』や『A感覚とV感覚』などがやはり有名なのでしょう。「昔、稲垣足穂が好きで、何度も何度も読み返したこともあったんですよね」などとつい言ってしまうと、「あ、あそうなの」なんてばつの悪そうな顔をされてしまって、「ありゃ、しまった」ということも少なくありません。

「削ぎおとされたアブストラクトの美」の香りに強く惹かれて…

今から15年ほど昔のこと、私はアメリカで統計学を学ぶ大学院生でした。もうここで失敗したら後はないと、今振り返れば滑稽なぐらい真剣で、文字通り食事する時間も惜しんで勉強や研究に没頭していました。そうした生活を続けていると突然無性に日本語の活字が読みたくなるものです。突然襲う禁断症状に備えて、日本から持っていった文庫本の中の一冊がこの『宇宙論入門』でした。

統計学という学問は応用数学という側面も持っているので、論文を理解するためにはそれ相当の数学知識が必要です。日々の課題に追われながら、残りの時間で論文を読んだり、数学書を読んだりしていました。ただ、そうやって熱心に数学を勉強したのは、「必要であるから」という理由だけではありません。数学のもつ純粋に抽象的な美しさやかっこよさ、足穂いうところの「ダンディのたね」に惹かれていたのは間違いありません。

天文学や数学を愛し、あこがれていながら、足穂自身は天文学者や数学者ではありませんでした。私がこの作品に惹かれて何度も読み返してしまったのは、数学のディレッタントとでもいうのでしょうか、そのあり様に少なからず共感してしまったことも理由の一つだと思います。これもまた「恥ずかしい」お話です。

この文章を読まれている方の中にも、かって少年少女の頃に天文学者や数学者にあこがれた方もいらっしゃるでしょう。そしてそのあこがれを形作っていたものは、決して名誉や名声などではなく、巻末解説の楠田枝里子さんの言葉を借りれば、「削ぎおとされたアブストラクトの美」の香りに強く惹かれていたからではないでしょうか。本書は宇宙論解説書としての新しさや正確さを期待させるものではありません。しばらく忘れていたかもしれないあの「香り」を懐かしむ方におすすめする一冊です。

浦田一郎　法学研究科教授

【リカンベント】

どういう訳か私は趣味が多く、そのなかでサイクリングは２番目に熱心な趣味である（１番目はヨーガ）。サイクリング歴は約30年であり、その経緯については「自転車は美しい」一橋スポーツ（一橋大学体育会）27号（1996年）として書いたことがある。現在持っている自転車は、通勤用、ランドナー（フランス語で、randonneurと書き、ハイカーの意味）、マウンテン・バイク、ロード・レーサー、リカンベント（英語で、recumbentと書き、仰向けになったという意味の形容詞）で、５台になる。リカンベントは珍しい自転車なので、本誌のこのコーナーにリカンベントのことを書くことになった。そのことを家族に話したら、このコーナーは変人コーナーかと言われた。そう言っては、前号に登場した卓球クラブの王さんや西村先生達に失礼だろう。

製造が禁止された歴史を持つ自転車のスポーツ・カー、リカンベント

リカンベントは19世紀末には既に作られていたが、スピードが出過ぎて危険だとして当時は禁止され、その後復活したと読んだことがある。車体が低いので空気抵抗が少なく、また背中を押してペダルを蹴るので力が入る。時速100キロが記録されているそうで、私はリカンベントのことを自転車のスポーツ・カーと考えている。

買うかどうか数年前から迷っていたが、去年の３月に管理職が終わり、そのお祝いとして思い切って買った（管理職で苦労されている方々に、申し訳なく思っている）。私が買ったリカンベントはオランダ製だが、オランダ人は世界でも最も足が長い。私の足の長さ（あるいは短さ）に合わせて、車軸を切ってもらった。そうしたら、カーブのときにペダルが車輪に少し当たり、急なカーブが切りにくくなっている。製作したオランダ人には、想定外の事態だったらしい。乗り始めの頃は、子供にたかられたり、犬に吠えられたり、警察官に呼び止められたりした。朝私がリカンベントに乗って出勤しようとしていたら、近所の奥さんが「浦田先生が通るよ」と言って、子供を呼んでいた。

乗りこなせない故に盗まれにくい

リカンベントは、バランスを取るのが普通の自転車より難しい。雨が予想されるときは、普通の自転車にしている。上り坂ではギアを落として、背中で踏ん張るので困らない。最初はジャケットの背中に皺がよったが、皺がよらないように乗るコツを覚えた。滑るように走り、独特の快適さがある。７月の暑い日に多摩川のサイクリング・ロードを走って、羽田空港まで往復した。日焼け止めクリームを何度も塗ったが、仰向けになっているので、照り焼きのようになった。昼食を羽田空港のレストランで取ろうとしたが、羽田空港には駐輪場がなく、羽田空港での昼食を諦めた。羽田空港は、自転車で来る人のことを予定していないようだ。

リカンベントのなかでも少し高目の物を買ったが、リカンベントは盗られにくいと聞いている。乗って逃げようとしても、直ぐには乗れないからである。リカンベントをインターネットで調べると、種類、値段、購入方法等が分かるので、関心のある人はどうぞ。春はサイクリングと花粉症の季節で、鼻をかみながらサイクリングすることを楽しみにしている。

西成田 豊　経済学研究科教授

囲碁と礼儀

私の趣味のひとつに囲碁がある。囲碁も勝負事である以上、スポーツの試合のときのように礼儀が必要である。あまり杓子定規に考える必要もないが、おろそかにしてもいけない。この点で非常に礼儀正しかったのは山田欣吾先生（本学名誉教授）であった。先生は勝負が始まる前は、私のような若輩にたいしてもかならず一礼し、負けたときは—私が勝つことはほとんどなかったが—「負けました」とはっきりした口調で言った。私はこれまで優に百人を超える方と碁を打ってきたが、勝負が始まる前にかならず一礼し負けたときそのことをはっきり口にしたのは、山田欣吾先生だけであった。

敗北の言葉を30分にわたり長考した英国人

1993年から94年にかけて私がイギリスに留学したときの話である。日本語学科の学生で大変碁の好きなテリー君という学生がいて、留学中の日本人研究者のなかに碁を打つ人はいないかと一生懸命探していた。私が碁を打つということを知り、それなら一局打とうということになった。そしてテリー君を私の住んでいる家に招待することになった。

食事を終え碁盤に向ったものの、テリー君の級位、段位がわからないので、とりあえず四子置いてもらうことにした。しかし、打ち始めてからものの15分もたたないうちに、テリー君の大石を私が取りきってしまった。50～60目以上の地ができ、最後までどのように打っても私の勝ちは見えていた。しかし、それからが大変、テリー君の長考が始まった。一般にヨーロッパの人で碁を打つ人は長考する人が多いということを以前から聞いていたので、私はテリー君が何かすごい手を考えているのではないかと少々気になってきた。

しかし30分過ぎても打つ気配はない。私はとうとうしびれを切らして「テリーさん、早く打ってくださいよ」と言うと、テリー君はおもむろに顔を上げて「マケタバアイハ、ドウイエバイインデスカ」と言ったのである。なんと、テリー君は敗北の「礼儀」のことばを30分以上も思い出そうとしていたのである。私はこみあげる笑いをおしころしながら、日本の碁打ちの人にこんな奇特な人はいないと、妙に感じ入ったものである。ただ、いまから思えば、テリー君は日本のプロ棋士がひと昔前負けたときよく口にしていた「ありません」（もうどのように打っても私の負けですという意味）という言葉を必死に思い出そうとしていたのではないだろうか。

負けを認めない人に本気を装い、確実に負ける術を磨く

「負けました」というひと言で済む終局の「礼儀」でいまひとつ思い出されるのは、私が昔いた大学の老教授・A先生である。白髪混じりのボサボサ頭で歯が二、三本抜けていたが、そのことを意に介さないひょうひょうとした憎めない人柄の先生であった。A先生は講義で大学に来るときはかならず私の研究室をのぞき、碁に誘った。 A先生とは互先で五分五分の勝負であったが、私に負けると、先生は突然碁盤の石をメチャクチャにしてその上に上体を突っ伏し、握りこぶしをふたつ重ね合わせた上に額をあて、泣いているような素振りを見せてから少し間をおいておもむろに顔だけを上げ、二、三本歯の抜けたその顔でニタッと笑い、「もう一局！」と言ってのけたものである。二局打つとなると二、三時間はかかる。私は「碁」学担当教員としてこの大学に採用されたのではない。私は研究時間を確保するために、本気で打っているようにみせて、確実に負ける術をA先生との対局をとおして「学んだ」のである。A先生との勝負が五分五分となったのは、そのためである。

「一橋大学留学生国際シンポジウム」が初めて開催されました

「留学生ネットワークと21世紀の大学」をテーマにしたシンポジウムが平成17年２月18日に開催されました。
このシンポジウムは大学初の試みであり、各方面でご活躍の皆様をお招きし、講演や報告を頂きました。

プログラム

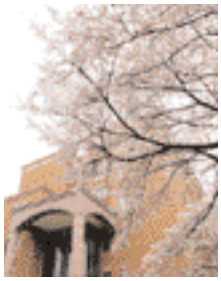
開会挨拶		学長　杉山武彦
第Ⅰ部	講演１	卒業留学生ネットワークの意味 講演者：前日米教育委員会日本事務局長　サムエル M. シェパード（現・全米日米交流協会連合理事長） 「卒業留学生のネットワークの構築とその意味」
	講演２	21世紀一橋大学の留学交流 講演者：留学生センター　教授　横田雅弘 「激動する世界の留学交流と一橋大学のこれから」
	講演３	一橋大学国際化の展開 講演者：一橋大学海外拠点　北京事務所首席代表　折敷瀬　興〈本学顧問（名誉教授）〉 「北京事務所の意味と今後の展開」
第Ⅱ部	報告１	中国上海における卒業生ネットワーク 中国上海留学生OB会会長　範　建亭（'02年経済学研究科修了） 上海財経大学国際工商管理学院副教授
	報告２	タイにおける卒業生ネットワーク 泰日経済技術振興協会理事　ブンチュウ T.（'85年経済学部卒業） カイネテックアドバンス株式会社社長
	報告３	台湾における卒業生ネットワーク 台湾留学生会会員　許　懐儷（'96年法学研究科修了） 萬國法律事務所　弁護士
	報告４	韓国における卒業生ネットワーク 韓国留学生会会長　裵　埈晧（'95年経済学研究科修了） 韓神大学校教授
全体討論 パネルディスカッション		司会：田崎宣義　副学長
交流会（佐野書院）		司会：五味政信　留学生センター長

訃報

経営協議会委員の沼野藤夫殿（東京医科歯科大学名誉教授）には平成16年10月21日に急逝されました。
沼野殿には本学の国立大学法人化前後の激動期に多大なるご貢献をいただきました。
ここに哀悼の意を表し、慎んでご冥福をお祈りいたします。

一橋大学運営諮問会議委員（平成12年４月１日～平成16年３月31日）
一橋大学経営協議会委員　（平成16年４月１日～平成16年10月21日）
一橋大学学長選考会議委員（平成16年４月１日～平成16年10月21日）

Hitotsubashi Quarterly



春号 April 2005 Vol.7

公開講座のお知らせ

平成17年度　一橋大学春季公開講座日程

Ⅰ. リスク社会における保険の役割

講義時間 13：00〜15：00

日程		講師名	各回ごとのテーマ
第１回	5／7	米山高生 大学院商学研究科教授	リスクとは何か？
第２回	5／14	石原　全 名誉教授・関東学院大学教授	遺伝子情報と生命保険契約
第３回	5／21	近見正彦 大学院商学研究科教授	損害保険と生活
第４回	5／28	米山高生 大学院商学研究科教授	リスク社会における保険企業
第５回	6／4	下和田　功 名誉教授・帝京大学教授	わが国の社会保障制度と家計 ―年金・医療・介護を中心として―

Ⅱ. 紛争の地域史

講義時間 15：10〜17：10

日程		講師名	各回ごとのテーマ
第１回	5／7	加藤　博 大学院経済学研究科教授	岐路に立つ中東 ―パレスチナ／イスラエル、イラクを中心に―
第２回	5／14	清水　学 大学院経済学研究科教授	エスニック宗派の共振とネジレ意識 ―中央アジア・コーカサス―
第３回	5／21	谷口晋吉 大学院経済学研究科教授	インド・パキスタン分離独立の背景 ―ベンガル地方の場合―
第４回	5／28	江夏由樹 大学院経済学研究科教授	日露戦争後、東部内モンゴルを めぐる中国と日本
第５回	6／4	大月康弘 大学院経済学研究科助教授	現代に露呈する中世帝国の遺産 ―バルカン地域の緊張関係―

※申込期間：3／30〜4／8
※お問い合せ先：総務企画課総務係（TEL：042-580-8010）

編集後記

新歓特集号をお届けします。満開の桜の下、フレッシュパーソンを迎えるのは、いくつになっても心躍るものです。本誌を手に取られた新入生の皆さんも、学長をはじめとする励ましのメッセージを読み、あらためて目の前に開かれた無限の可能性を感じていることでしょう。

本誌は、一橋大学の広報誌として創刊されたもので、年４回発行されています。ご覧のように、在校生も知らないような豊かな情報が満載されており、これまでも、兼松講堂などロマネスク調の歴史的建造物、質・量ともに充実した蔵書を有する図書館、密度の濃い大学生活の場であるゼミなど、本学が誇りとする伝統を特集で取り上げてきました。これらを読まずして皆さんの大学生活の充実はありえないといっても、過言ではないでしょう。

本誌（「HQ」＝一橋クォータリー）は事務棟１階など学内各所に置かれ、無料で入手することができます。これからも、よろしくお付き合いをお願いします。

広報誌編集委員　池　享

一橋大学広報誌「HQ」

〈編集発行〉
一橋大学広報委員会

〈委員長〉
副学長（社会連携担当）　伊藤邦雄

〈編集委員〉
商学研究科助教授　松井　剛
経済学研究科教授　池　享
法学研究科助教授　山田　敦
社会学研究科教授　足羽與志子
言語社会研究科教授　坂井洋史
国際企業戦略研究科助教授　大上慎吾
経済研究所教授　安田　聖

〈印刷・製本〉
株式会社情報研究社

〈お問い合わせ先〉
一橋大学学長室企画広報係
〒186-8601　東京都国立市中2-1
Tel：042-580-8032
Fax：042-580-8016
http://www.hit-u.ac.jp/
koho@ad.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。
一橋大学学長室企画広報係
koho@ad.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の
無断転載はお断りします。

お詫びと訂正

前号（HQ冬号 Vol.6）において、一部誤りがありました。
関係者の方々にお詫びいたしますとともに訂正を以下に明記いたします。

●25ページ
【誤】博鰲（ボ・アオ）中国商務部前副部長・中国WTO交渉総責任者
【正】龍永図（ロン・ヨント）博鰲亜洲論壇秘書長　中国商務部前副部長・中国WTO前交渉総責任者

●50ページ
【誤】国際司法の妖場準一先生のゼミです。
【正】国際私法の妖場準一先生のゼミです。

Hitotsubashi Quarterly 春号
April 2005 Vol.7 編集・発行／一橋大学広報委員会
〒186-8601 東京都国立市中2-1 Tel:042-580-8032 http://www.hit-u.ac.jp/ koho@ad.hit-u.ac.jp